

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.150

2005年11月

名古屋大学ホームカミングデイを開催



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

目次

●ニュース	
名古屋大学ホームカミングデイを開催	2
S. ナランゲレル博士に名誉博士号を授与	9
大学院留学生特別コース学位記授与式等を挙	9
平野総長が中国・復旦大学設立百周年記念式典に招待される	10
第2回全学教育担当教員FDを開催	11
全国6地区で開催された主要大学説明会に参加	12
地震防災訓練を実施	12
●同窓生から	
万博を予測できたIT、予測できなかったIT	13
川瀬 洋一（財団法人2005年日本国際博覧会協会情報通信管理室調査役）	
荻野 直之（株式会社電通中部支社2005年日本国際博覧会営業室営業部）	
●学生の元気	
愛・地球会議クロージングフォーラムに参加して	14
川原 万季（大学院生命農学研究科生命技術科学専攻博士課程前期課程1年）	
第44回全国七大学総合体育大会	16
東海地区国立大学体育大会及び全国七大学総合体育大会を終えて	18
男子バドミントン部	
●職員から	
放射線施設の安全管理業務について思うこと	19
内藤 壽朗（全学技術センター共通基盤技術支援室安全管理技術系前任技術専門員）	
●知の先端	
X線観測衛星すざく（朱雀）、目を開ける！	20
國枝 秀世（大学院理学研究科教授）	
●教育のデザインとプラクティス	
「人類生存のための科学」という実験	22
戸田山和久（大学院情報科学研究科教授）	
●キャンパスクローズアップ	
医学部附属病院 新中央診療棟（第2回）	24
●部局ニュース	
キャリア再設計セミナーを開催	26
シンポジウム「裁判員裁判について考える」を開催	26
法学研究科ウズベキスタン代表団一行が中山文部科学大臣を表敬訪問	27
国際シンポジウム「モンゴル遊牧社会と土地所有」を開催	27
国際大学交流セミナー（JASMIN セミナー）を開催	27
市民・学術交流シンポジウム「プラズマとドイツ」を開催	28
東山総合運動場・人工芝竣工記念式を挙	28
今年度の農業教育公園・講演会が始まる	29
自然観察会「どのバツタが一番跳ぶかな」を開催	29
平成17年度全国大学演習林協議会秋季総会が本学で開催される	29
情報連携基盤センター連続講演会（第1回）・グリッド講演会を開催	30
第2回ランチタイムFDを開催	30
国際言語文化研究科が留学生を対象とした文化研修を実施	31
地球水循環研究センターが中国との共同研究ワークショップを開催	31
ICCAE2005年度第3回オープンセミナーを開催	31
博物館が被爆体験の講演会を開催	32
先端技術共同研究センター第1回オープンフォーラムを開催	32
●受賞者一覧	33
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年9月16日～10月15日	34
●イベントカレンダー	37
●ちょっと名大史	
嬰鳴寮から国際嬰鳴館へ	40

名古屋大学ホームカミングデイを開催





名古屋大学ホームカミングデイが、10月23日（日）、東山キャンパスにおいて、全学同窓会の共催を得て開催されました。

この行事は、卒業生・修了生、学生、現旧教職員等の本学関係者や学生の家族、地域の方々等に、本学の種々の活動に関する情報を発信するとともに、交流の場を提供し、大学の活動を理解してもらうことを目的として、今回初めて開催されたもので、当日は、時折小雨も降るあいにくの天候となりましたが、同窓生や学生の家族を中心に、約2,000名の参加がありました。

ホームカミングデイでは、開会式・全学同窓会総会、講演会「F1の楽しみ方」、懇親会等の本部行事、施設公開、教育・研究発信、F1カーの展示、大学文書資料室による企画展示や大学院生命農学研究科附属農場の農産物販売、部局・部局同窓会行事などが行われ、思い思いにホームカミングデイを楽しむ参加者の姿がキャンパスのあちらこちらで見られました。

なお、本学では、参加者に対するアンケートを実施し、来年度のホームカミングデイの参考にすることとしています。

■本部行事

名古屋大学ホームカミングデイ開会式及び全学同窓会第4回総会をはじめとする本部行事が、午後2時30分から、豊田講堂ホール等において、本学法学部卒業生の吉田一貫NHK 富山放送局アナウンサーの司会進行により開催されました。

開会式及び総会では、初めに、平野総長から、「自分が卒業した大学、在学する大学、関係した大学に、愛情や誇りを持ってもらえることなくして、本学の発展はありません。大学を顧みてもらえるように、構成員が一致団結して、同時に地域の方々と強い連携を図り、本学が世界一流の大学となるように、さらに発展させていきたい。」とあいさつがありました。続いて、豊田章一郎全学同窓会会長が所用で欠席のため、全学同窓会を代表して、伊藤忠商事株式会社取締役会長で、本学経営協議会委員の丹羽宇一郎副会長から、最近、本学の同窓生が各界で活躍されていることを嬉しく思い、今後より一層活躍することを望んでいること、平野総長等の尽力により、ホームカミングデイが開催されたことに感謝するとともに、今後も継続して開催することを期待している旨のあいさつがあった後、伊藤義人全



2 | 3 | 4

1 | 5

- 1 全学同窓会の活動報告をする伊藤代表幹事
- 2 ホームカミングデイ開会式・全学同窓会総会
- 3 ホームカミングデイ開会式・全学同窓会総会であいさつする平野総長
- 4 ホームカミングデイ開会式・全学同窓会総会であいさつする丹羽全学同窓会副会長
- 5 F1カーを見る（左から）丹羽全学同窓会副会長、齋藤明彦氏、平野総長、太田全学同窓会副会長



6
7 | 8

- 6 講演する齋藤明彦氏
- 7 丹羽全学同窓会副会長から支部旗を授与される Md. Sayeedul Islam Khan バングラデシュ支部長
- 8 演舞会でダンスを披露する舞踏研究会のペア



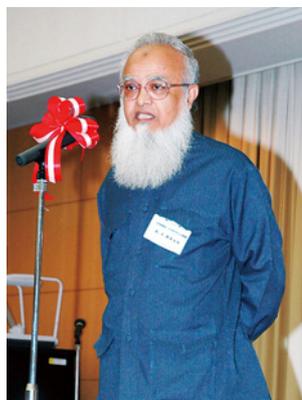
学同窓会代表幹事による同会の活動報告が行われました。その後、総会に先立って行われた全学同窓会評議員会で設立が認められたバングラデシュ支部に対して、丹羽副会長から、同支部長の Md. Sayeedul Islam Khan 氏 (GRAM BANGLA Sangstha 代表) に、支部認定証と支部旗が授与されました。

続いて、トヨタ自動車株式会社相談役で、株式会社デンソー副会長の齋藤明彦氏による「F1の楽しみ方」と題する講演が行われました。齋藤氏は、昭和43年本学大学院工学研究科博士課程修了後、トヨタ自動車工業株式会社（現トヨタ自動車株式会社）に入社し、同社で取締役、取締役副会長を歴任されるとともに、トヨタ F1 チームのチームリーダーとして活躍されてきました。世界のモータースポーツの最高峰である F1 の歴史、F1 カーの特徴等の F1 に関する一般的な説明からはじめ、トヨタの F1 プロジェクトの概要、トヨタの F1 の歩みや活動結果、入賞 23 回、表彰台 5 回という結果を残した 2005 年の躍進の要因について、チームリーダーとしてトヨタ F1 チームに携わってきた経験談を交えながら話されました。また、トヨタ F1 チ-

ームが来年度 F1 で勝つための 4 つの要素として、車両・エンジン開発、チーム、ドライバー及びタイヤを挙げ、各要素について詳細に説明された後、コースの特徴や予選燃料搭載量とピットストップ戦略等の F1 の見どころについて触れられ、講演は終了しました。

その後、演舞会として、昨年 12 月に行われた第 49 回全日本学生競技ダンス選手権大会で優秀な成績を修めた舞踏研究会によるダンスが披露されました。

シンポジオンホールに会場を移して開催された懇親会では、平野総長のあいさつの後、全学同窓会副会長の岡田邦彦株式会社松坂屋取締役社長の発声により乾杯が行われ、終始なごやかな雰囲気の中で歓談がもたれました。歓談中には、民族舞踊団音舞による力強く、息の合った演舞や、全学同窓会韓国支部長の尹炳虎江原大学教授及びバングラデシュ支部長の Md. Sayeedul Islam Khan 氏による流暢な日本語によるあいさつ、名古屋大学混声合唱団による合唱等が行われ、最後に、参加者全員で学生歌「若き我等」を歌い、懇親会は盛況のうちに終了しました。



9	10	11
12	14	
13		
15	16	17

- 9 懇親会で乾杯の発声をする岡田全学同窓会副会長
- 10 あいさつする尹炳虎全学同窓会韓国支部長
- 11 懇親会
- 12 懇親会で演舞を行う民族舞踊団音舞
- 13 懇親会で合唱する名古屋大学混声合唱団
- 14 あいさつする Md. Sayeedul Islam Khan 全学同窓会バングラデシュ支部長
- 15 ケミストリーギャラリーを見学する参加者
- 16 博物館を見学する参加者
- 17 職員の案内で中央図書館を見学する参加者



■施設公開

野依記念物質科学研究館では、ケミストリーギャラリーが公開され、訪れた人は、野依良治特別教授の受賞されたノーベル化学賞のメダルのレプリカや、同教授の研究業績のパネル等を熱心に見ていました。

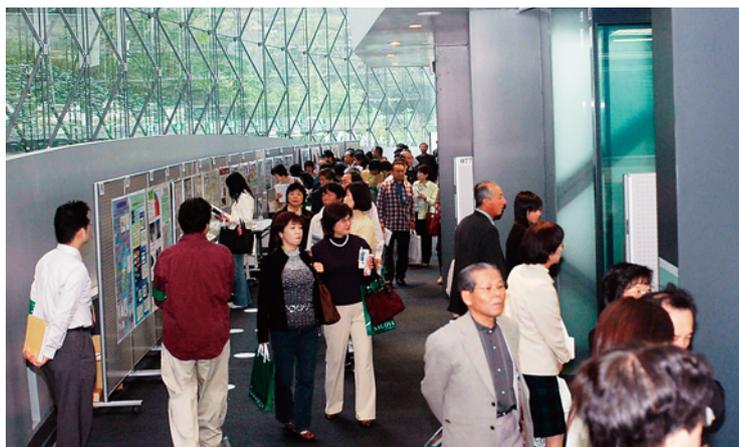
また、附属図書館では、2005年秋季特別展「知の万華鏡－書物からみた18世紀の西洋と東洋」と中央図書館ツアーが、博物館では、ホームカミングデイに合わせ、新着標本「奈良坂源一郎の蟲魚圖譜 明治の博物画」の展示が行われました。

■教育発信

午前10時から豊田講堂ホールで行われた本学の教育活動紹介では、若尾理事(教育担当)のあいさつ、大学紹介DVDの上映の後、学生相談総合センターの船津静代助手

が、「名古屋大学の就職支援について」と題して、また、田中宣秀就職支援アドバイザーが、「産学協同教育としてのインターンシップ」と題して講演し、約800名の学生の保護者は熱心に聞いていました。その後、若尾理事、山本総長補佐(教養教育担当)及び2名の講演者と参加者との質疑応答が行われ、参加者からは、就職活動を始める時期が早くなり、就職活動に割く時間が多い状況では、学業との両立が難しいのではないかと等就職活動についての質問を中心に、学生生活全般について質問が出されました。

また、豊田講堂ロビーでは、大学院工学研究科・工学部の特色GP「創成型工学教育支援プログラム」の取り組み、大学院教育発達科学研究科・教育学部附属学校の「学びの杜」等の6件のパネルによる教育活動紹介や、23のサークルの写真パネルによる部活動紹介が行われるとともに、学生総合支援課内の就職資料コーナーの公開等も行われました。



- 18 講演する船津学生相談総合センター助手
- 18 | 19 パネルによる教育活動紹介
- 20 | 20 「名古屋大学における男女共同参画」
- 20 | 20 研究活動紹介

■研究発信

野依記念学術交流館では、本学の21世紀 COE プログラム拠点を含め、文系・理系の幅広い分野から、約70のグループによる研究活動紹介が、パネル展示のほか、ビデオ上映、装置の展示、パソコンを利用したデモンストレーション等の工夫を凝らした形で行われ、参加者は本学における最先端の研究活動に触れるとともに、本学で行われている研究活動の幅広さを実感していました。また、野依記念物質科

学研究館1階では、高等研究院の紹介、同研究プロジェクトの概要、同教員に関する新聞記事等がパネル展示されました。



21	22
23	24

- 21 F1カーを見る参加者
- 22 名古屋大学グッズ・トヨタF1グッズの販売
- 23 大学文書資料室・企画展示「名大キャンパスの変遷と豊田講堂」を熱心に見る参加者
- 24 大学院生命農学研究科附属農場の農産物販売



■その他

豊田講堂ピロティでは、講演会「F1の楽しみ方」に関連して、トヨタF1チームのF1カーが展示され、なかなか間近で見ることができないF1カーをバックに記念撮影をしたり、携帯電話でF1カーを撮影したりする参加者の姿が多く見られるなど、大変好評でした。

また、豊田講堂ロビーで行われた大学文書資料室による企画展示「名大キャンパスの変遷と豊田講堂」では、名古

屋帝国大学キャンパス構想模型（田村模型）を中心とした名古屋帝国大学草創期のキャンパス構想やキャンパスの変遷の紹介、豊田講堂をテーマとした短編ムービー（3作）の上映、豊田講堂関係資料の実物展示が行われました。

さらに、豊田講堂前庭では、大学院生命農学研究科附属農場で収穫された米、トマト、サツマイモ等の農産物の販売、名古屋大学生協による名古屋大学グッズやトヨタF1グッズ等の販売が行われました。



25	26	27	25 文学部・大学院文学研究科同窓会「秋季サロン」 折り紙作家・丹羽兎子氏（大学院文学研究科修士）による折り紙教室
28	29	30	26 経済学部・大学院経済学研究科部局行事 同研究科教員の著作や研究・教育内容のポスターの展示を見る参加者
31	32	33	27 工学部・大学院工学研究科部局行事 西山研究室（化学・生物工学専攻応用化学分野）を見学する参加者
			28 教育学部・大学院教育発達科学研究科部局行事 最近の教育学部の様子を熱心に聞く参加者
			29 情報文化学部部局行事 情報文化学部の現状について説明する佐野情報文化学部長
			30 農学部・大学院生命農学研究科部局行事 講義室を見学する参加者
			31 法学研究科・法学部ホームカミングデイ あいさつする佐分法学研究科長
			32 医学部・大学院医学系研究科講演会
			33 大学院情報科学研究科同窓会昼食会

■部局行事・部局同窓会行事

各部局及び部局同窓会では、学部・研究科の概要説明、講演会、研究室見学、懇親会等の趣向を凝らした行事が下記のとおり実施され、同窓生を中心に多くの参加があるなど、盛況となりました。

文学部・大学院文学研究科

- 文学部同窓会秋期サロン
- ①昼食会
- ②話題提供（田島毓堂氏）
- ③丹羽兎子氏による折り紙実演・展示
- ④写真・パネルの展示

教育学部・大学院教育発達科学研究科

- 懇談及び学部紹介

法学部・大学院法学研究科

- 法学研究科・法学部ホームカミングデイ
- ①研究科長・法学部同窓会理事長挨拶
- ②講演「会社法改正」浜田道代教授
- ③施設見学
- ④懇親会

経済学部・大学院経済学研究科

- 研究・教育内容のポスター展示

情報文化学部

- 情報文化学部の現状について（学部長）
- 研究活動の紹介（2期卒業生 鈴木助手）

理学部・大学院理学研究科

- ①学科別ミーティングと研究室公開
- ②理学同窓会総会と懇親会（軽食）

医学部・大学院医学系研究科

- 講演会
- ①「高齢化社会を迎えて」井口昭久病院長
- ②「これからの予防医学」濱嶋信之教授

工学部・大学院工学研究科

- 研究室公開、その他

農学部・大学院生命農学研究科

- 概要説明・研究室見学

大学院多元数理科学研究科

- 懇談

大学院情報科学研究科

- 情報科学研究科同窓会昼食会

S. ナランゲレル博士に名誉博士号を授与

S. ナランゲレル博士（モンゴル国立大学法学部長）に対する名誉博士号（第14号）の授与式が、9月17日（土）、大学院国際開発研究科多目的オーデトリウムにおいて、平野総長、森、杉浦、若尾、豊田の各理事、佐分法理学研究科長、杉浦法政国際教育協力研究センター長、モンゴル国から、スフバートル法務内務省副大臣、ジグジッド駐日モ



平野総長から名誉博士号を授与される S. ナランゲレル博士

ンゴル国大使館臨時代理大使らの出席のもと挙行されました。

S. ナランゲレル博士は、モンゴル国立大学法学部で研究と教育に携わる一方で、検察庁長官補佐、検察庁事務局長、モンゴル弁護士会会長等を歴任するなど実務の分野でも多くの業績を残してこられました。また、博士は、同国の民主化運動で、社会主義時代に粛清された人々の名誉回復に尽力し、法律面から「無血の民主化」を支え、民主化後は国会議員として同国の改革にあたってこられました。

大学院法学研究科は、1995年からモンゴル国立大学法学部との交流を進め、2000年4月には学術交流協定を締結し、多くの留学生を受け入れています。また、同研究科と法政国際教育協力研究センターは、モンゴル国立大学法学部との共催で国際シンポジウムを2004年9月にモンゴル国で、2005年9月には名古屋で開催するなど、本学はモンゴル国立大学法学部の最も重要な学術交流協定校として重視されています。こうした本学とモンゴル国立大学の交流、日本とモンゴル国の法律分野での国際協力は、博士の尽力なしには実現しなかったといえ、今後も両国の架け橋としての一層の活躍が期待されます。

大学院留学生特別コース学位記授与式等を挙行

大学院留学生特別コース及び医学系研究科医療行政コース学位記授与式が、9月27日（火）、シンポジオンホールにおいて、総長、理事、研究科長の列席のもと挙行されました。

本学には、現在、大学院における外国人留学生のための英語による特別コースが、大学院法学研究科博士課程（前



学位記授与式の様子

期課程）綜合法政専攻、大学院医学系研究科修士課程医学専攻、大学院工学研究科博士課程（後期課程）社会基盤工学専攻及び大学院環境学研究科博士課程（後期課程）地球環境科学専攻で開設されており、平成9年度からは、海外の入学・修了時期に合わせ、9月に学位記授与式を行っています。

授与式では、平野総長から、大学院法学研究科の4名及び大学院医学系研究科の13名に修士の学位記が、大学院工学研究科の3名及び大学院環境学研究科の3名に博士の学位記が一人一人に授与され、次いで、本学での課程を修了したことへの祝いのことばと、本学で学んだ知識や技術をさらに研鑽し、母国のみならず、世界の発展のため力を発揮することを希望する旨のはなむけのことばが贈られました。これを受けて、修了生を代表して、大学院環境学研究科のマディラ アディカリさん（ネパール王国）が、日本での研究生生活、指導教員や学生との交流など留学中のエピソードを交えた謝辞を流暢な日本語で述べました。閉会後には、列席者、指導教員、修了生の家族等を交えて記念撮影が行われるなど、厳粛な中にも和やかな雰囲気となりました。

平野総長が中国・復旦大学設立百周年記念式典に招待される



復旦大学設立百周年記念式典

平野総長は、9月22日（木）から25日（日）までの4日間、上海を訪問しました。今回の訪問は、大学間学術交流協定校である中国・復旦大学からの招待に応じたもので、同大学の百周年記念行事に出席するとともに、上海交通大学の訪問、名古屋大学上海事務所の予定地と11月11日に上海で開催する名古屋大学国際学術論壇（上海フォーラム）会場の視察を行いました。

復旦大学設立百周年記念行事では、上海市長、復旦大学長、オックスフォード大学長、エール大学長、シドニー大学長等による学長フォーラム（パネル・ディスカッション）、記念式典、バンケット等の催しのほか、復旦大学の個別パートナー事業の式典が行われ、日本からは、平野総長、東京大学、京都大学、九州大学、早稲田大学及び立命館大学の各総長を含め、20余りの大学からの参加がありました。

学長フォーラムでは、「都市の発展と高等教育の相互作用」をテーマに、グローバル・シティを標榜する上海の発展を背景として、各学長から、象牙の塔から社会への貢

献、地方公共団体や外国大学との共同事業など、各大学の特色的な取り組みについて発表があり、活発な意見交換等が行われました。復旦大学のスタジアムで行われた式典では、呉邦国中国政府全人代常務委員長をはじめとする政府要人、姉妹大学長、復旦大学交友会、学生等が巨大な会場を埋め尽くし、復旦大学の新しい門出を祝いました。平野総長は、記念行事会場で、国内外の学長と昨今の様々な課題について意見交換を重ねました。

また、平野総長は、会議の合間に、上海交通大学を訪問し、謝学長と上海を拠点として実施する共同研究の両大学の協力について意見交換を行うとともに、上海フォーラムへの同大学の参加と協力を依頼しました。

その後、名古屋大学上海事務所を設置する予定のビルを訪問し、改修工事の進捗状況を視察しました。この事務所には、上海での共同研究等の拠点として利用できるよう、研究スペース、会議スペースが設けられており、上海フォーラムの開催に合わせて開所されました。



式典後の昼食会にて



謝上海交通大学学長との懇談の様子

第2回全学教育担当教員FDを開催



講演する絹川氏

平成17年度の第2回全学教育担当教員FD（教養教育院主催）が、9月26日（月）午後、全学教育棟本館で開催され、各部局から178名の教員が参加しました。若尾教養教育院長（教育担当理事）からは、今回のテーマ「教養教育のめざす方向を考える」の紹介とともに、全学教育棟の改修計画が着実に進んでいることが報告されました。

次いで、外部講師として国際基督教大学元学長で、文部科学省「特色ある大学教育支援プログラム」（特色GP）の実施委員長である絹川正吉氏（今年度の本学高等教育研究センター客員教授）から、今回のFDのテーマである「教養教育のめざす方向」について講演いただきました。絹川氏によれば、学士課程においては教養と専門という二分法的な議論は無意味であり、4年間トータルでどういう教育をするのかという意味での「カレッジ教育」が重要であるといいます。その中でも、初年次教育は新入生を知的世界の土俵に乗せるという大きな意味を持っています。教養教育の本質は、学生が大学人としての「知的誠実性」（インテグリティ）を身につけることであるとする絹川氏の意見は、教養教育を担当する多くの教員が悩み続けてきた「教養とは何か」という本質的な問題に一つの見識を示すものでしょう。

二人目の話題提供者として、高等教育研究センターの中井俊樹助教授が、「授業に学生を参加させるための具体的方法」について説明を行いました。高等教育研究センターでは、授業ノウハウを共有するための手段として、『ティップス先生からの7つの提案』を開発しました（参加者に配布）。この『7つの提案』は、主に学内での調査を通じて優れた教育実践例をデータベース化し、教授法や学習理論研究の成果に基づいて、それらを整理したものです。また、教員・学生・大学組織の三者のそれぞれが教育改善に向けて取り組めるように、教員編、学生編、大学編の3種類の冊子から構成されています。本学の教育現場でこれらを有効に活用することが期待されています。

(<http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/seven/>)

続いて、評価企画室副室長の栗本英和情報科学研究科助教教授が、「大学の認証評価とは何か」について説明を行いました。これまでの大学の質保証は設置基準審査によって担保されていましたが、今後は大学機関別の認証評価を受けることが義務づけられるようになりました。いわば事前点検方式から事後点検評価方式に大きく変化したといえます。認証機関の一つである大学評価・学位授与機構の大学評価基準をみると、大学の目的、教育研究組織、教員及び教育支援者、学生の受入、教育内容及び方法、教育の成果、学生支援等、施設・設備、基準、教育の質の向上及び改善のためのシステム、財務、管理運営など11項目にわたる基準が設定されており、これらの達成度を示す具体的証拠が求められるようになるとの説明がありました。

全体会の最後は、科目別FDでグッド・プラクティス報告を担当する教員の紹介が若尾教養教育院長から行われました。11の科目別部会に分かれて行われた今回の科目別FDでは、計19名からの報告があり、授業実践についての活発な意見交換が行われました。

（文責：近田政博高等教育研究センター助教授）



熱心に聞く参加者

全国6地区で開催された主要大学説明会に参加

主要大学説明会が、9月24日（土）から10月29日（土）の間に、全国6地区（札幌・仙台・東京・名古屋・大阪・福岡）で開催され、本学は6地区すべてに参加しました。

この説明会は、東京大学の呼びかけにより、全国の国立・私立の主要大学が参加して開催されたもので、各地区とも500名前後の受験生・高校生等が集まり、終日活気にあふ



基調講演をする戸田山高等教育研究センター長

れていました。

いずれの地区でも基調講演、大学説明及び個別相談が行われ、仙台では、若尾理事（教育担当）が、東京では、戸田山高等教育研究センター長が基調講演を行いました。また、札幌、仙台及び東京では、入試課職員による各学部紹介や入学者選抜等の大学説明が行われ、受験生・高校生等は皆真剣に聞き入っていました。ブースでの個別相談では、熱心に質問やメモを取る参加者の姿が見られるなど、各地区とも好評のうちに終了しました。

地震防災訓練を実施

名古屋大学地震防災訓練が、10月12日（水）午前10時40分から12時00分（第2時限目の授業時間）に、東山地区、鶴舞地区、大幸地区、豊川地区、留学生会館及び国際嚶鳴館で実施されました。

この訓練は、職員、学生等の防災意識の高揚を図ることを目的に、平成15年度から実施されているもので、今回からは、10月第2水曜日の「国際防災の日」に実施されるこ



起震車による模擬体験

とになり、昨年に続き、勤務（講義）時間中に震度6弱の地震が発生したことを想定して情報伝達、安否確認、避難訓練や部局独自の訓練等が行われました。

当日は、午前10時37分に大地震が発生したことを想定し、平野総長から災害対策統括本部設置の指示が出され、訓練開始情報は、電話、FAX及び東山キャンパス内に設置した屋外防災無線装置で伝えられ、館内放送（日本語・英語）も利用されました。今年4月に整備された自然災害対策規程により、災害時の全学的な責任分担が明確化され、この責任分担が有効に機能するか否かの確認が今回の訓練の主目的とされましたが、全部局で、災害対策要員集合人数及び在室者の安否が確認され、その結果が本部に迅速に伝えられました。また、各部局では、独自に防災隊を立ち上げ、災害時の役割分担が確認されるとともに、部局独自の防災訓練も数多く行われました。災害対応要員以外の教職員、学生等は、防災教育の一環として、豊田講堂で行われた防災講演会、起震車による模擬体験、応急手当の体験、消火器の取扱訓練に参加しました。講演会では、総長、鈴木災害対策室長から防災に関する説明があり、約300名の参加者は熱心に聞いていました。

万博を予測できたIT、予測できなかったIT

川瀬 洋一 財団法人2005年日本国際博覧会協会情報通信管理室調査役

荻野 直之 株式会社電通中部支社2005年日本国際博覧会営業室営業部

「川瀬さん、明日の入場者数はどうなりそうですか？」

別に、私は予想屋ではない。万博の通称IT、情報通信全般の担当だった。しかしゴールデンウィーク以降、私のところにこんな質問がくるようになった。ちょっとした訳がある。

担当していたITの中に、 μ チップ入り入場券を使った予約システムがあった。パソコンと携帯のサイトで1ヶ月前から希望するパビリオンやイベントの予約を立てられる万博初のシステムだ。このシステムのデータを見ていたら、予約の埋まるスピードと来場者数に相関性があることあるとき気がついた。そしてデータを見てみると、来場者数が当然多いだろうと思われるGW中の5月5日だけ極端に予約の埋まり具合が遅かった。

「明日は来場者が少ないぞ。」

そう、立ち話で漏らしたら見事に的中した。万博では来場者数が予測できるということはとても大切。予測を参考に警備の人員などを手配する。予測がずれると、混乱を生じたりコストが跳ね上がる。翌日から、私の仕事には来場者数の予測という項目が増えてしまった。しかし、この方法による予測もすぐに有効でなくなった。万博の人気は日に日に増し、来場者が増え続けるにつれ、約2万席ある予約は毎日瞬時にして売切れてしまうようになり、差が出なくなってしまった。

思えば、万博のITで当初から頭を悩ませたのも色々な「予測の難しさ」だった。一時来場者予測に役に立った予約システムではあるが、開幕と同時に1週間サービスを停止せざるを得なかった。予測外のアクセス集中が原因だった。すぐに



万博会場

システム改修を指示して、何とか使える状態に導いた。それでも予約席数がオープンになる午前9時には公式サイトも含め反応が重くなった。

予測の難しい巨大な生き物のような万博。結局ITで扱った情報量は多大なものになった。一日あたりで、運営情報：約1500件、予約：約2万件、独自の取材情報：約50本出稿、交通情報：約1500件、地域情報：約3000件、気象情報：約4000件。これらをほぼ全て提供している公式ホームページは合計で4万ページ以上にのぼった。

これだけの情報を扱えるキャパがあっても予測外の事象に翻弄された。

我々のITが万博の全体像によりやく適合できたと思われたとき、万博が終わってしまった感じではあるが、根底のところでは、情報の提供のみに留まらず、IT博といわれた万博を支えられたのではないかと思っている。

万博のIT：職員のイントラネットから、公式ホームページ、予約のシステム、会場の中にある混雑表示盤等多岐にわたる。

かわせ よういち

1958年12月24日生まれ

愛知県出身

1983年大学院工学研究科修士課程修了

2005年11月末まで財団法人2005年日本国際博覧会協会に外向

2005年12月からトヨタ自動車株式会社コーポレートIT部

おぎの なおゆき

1975年4月6日生まれ

東京都出身

2000年理学部卒業



万博会場にて 左が川瀬氏 右が荻野氏

川原 万季

大学院生命農学研究科生命技術科学専攻博士課程前期課程1年

愛・地球会議クロージングフォーラムに参加して



私は9月21日に愛・地球博のEXPOドームで行われた、愛・地球会議クロージングフォーラム「持続可能な社会の創造をめざして」というイベントに参加しました。愛・地球会議は3月から9月まで毎月一回、世界の有識者や専門家が環境を中心としたメッセージを科学・教育・経済といった様々な観点から未来に向けて発信したイベントであり、私が参加したのはその最終回のクロージングフォーラムでした。このフォーラムには愛知県内で学ぶアメリカ、オーストラリア、中国、メキシコ、モロッコ、ロシア、スイスからの留学生と私を含めた日本人学生の計9人が参加し、持続可能な社会を実現するための未来への共同メッセージを発信しました。私たちは約半年間、毎月開催されてきたフォーラムに参加したり、万博会場内を視察したりして共に活動してきました。共同メッセージの作成をめざして「持続可能な社会の創造」のために大切なことは何かをともに考える過程で、生まれ育った背景も大学で学ぶ専門分野も全く異なる私たち9人からは非常に様々な意見が出されました。その中で最も大切なことは何かを議論した時、私たちたった9人が考えていることでさえもそれぞれ全く異なっており、とても多くの考え方や価値観が存在することに気づきました。そこで「多様性」こそが重要であると考え、

それをキーワードに「多様性の愛し方」についてまとめていくことにしました。世間一般でも「多様性は重要である」とか「多様性を認め合うことが大切だ」とよく言われ、私自身も漠然とそう思っていました。しかしこのメッセージを作り上げていく中で、実際には多様性を排除しようという考え方が存在するために世界では環境、貧困、紛争等の解決できない問題が起り続けるのだと改めて感じました。私たちは一週間近くかけて共同メッセージを作成しましたが、時には本気で意見のぶつかり合いが起り激しく議論をしたり、自分がそれまで考えもしなかった新しい価値観に出会って納得させられたりもしました。

私はこのフォーラムに参加して、日常では出会うことのできなかった多くの人たちと出会い、一つのものを作り上げていくという貴重な経験ができました。このフォーラムを終えたことに満足せず、私たちが未来に発信したメッセージが実現できる様に努力していきたいと思います。

1

2

- 1 「持続可能な社会の創造をめざして」の未への共同メッセージの発表 前列中央が筆者
- 2 愛・地球会議に参加した9人の学生たち

愛・地球会議クロージングフォーラム「持続可能な社会の創造をめざして」
未来へのメッセージ

多様性の愛し方

これからの未来を担う私たちは、20世紀に育まれた技術革新の恩恵に感謝する一方、近代化の弊害を明確にし、自然に対する謙虚さを学び始めました。循環型で自然の摂理にかなった新たな社会秩序を構築すべく、自然の叡智を学びながら人間の英知を結集させようとしています。

世界は今も、戦争・環境破壊・貧困・人口爆発・資源の枯渇・食糧問題など、さまざまな問題を抱えています。そして、グローバル化の中で人々は文化や価値の「多様性」と急接近することになりました。20世紀には、異なる価値観や異なる正義の対立によって、英知を結集すべき人々が反目し、地球の持続可能性を低下させてきました。21世紀に入り私たちは、文化や価値の多様性とどう付き合っていくかという問題、つまり「多様性の愛し方」が問われるようになったのです。

自然環境が生物種の多様性によって成り立っているように、人間社会も個々人のさまざまな立場・役割が存在するという多様性によって成り立っています。また、新しい知恵を取り入れて文化を作り上げてゆく人間にとって、多様性がなければどのような発展もありえないでしょう。互いの違いは互いの発展に役立つ可能性を秘めているのです。他者との違いこそが人間の尊い個性を生み、ひいては個人の尊厳へとつながります。

しかし一方で、多様な文化や価値観が混在する集団においては、一つの意味決定が困難となります。また、国際社会においては認識の違いから不幸な対立が生じます。例えば、歴史教育の場で、ある出来事に対する異なる事実認識の教育は国家間の友好関係を悪くし、個人レベルにまで悪影響を及ぼすこともあります。同じような感覚と意見を持った人々との居心地の良い共存に比べ、異なる価値観や多様な文化をもった人々と時間を共にすることは時としてわずらわしいことでもあるのです。

このような多様性と付き合うためには、相手に対する警戒心を解き、友好的な姿勢を持つ努力と、相手の価値観が生み出された背景や自然環境を知る努力が重要です。このためには、安易な妥協をせずに本音でぶつかり合うことも大切でしょう。しかし一方で、憎しみの連鎖を生み出すような衝突の中では、時として譲歩することも必要です。譲歩することは必ずしも、我慢の痛みを感じるだけの行為ではありません。日本語には、「譲ってあげる」「許してあげる」という言葉があります。「あげる」という贈与の気持ちを加えることによって、ひとりの痛みが共に前進する希望に逆転し、「譲る喜び」や「許す喜び」となるのです。

私たちは半年間、愛・地球会議で専門家による多様な考え方を学びました。また、ひとつのメッセージを作る作業を通して、私たち9人の小さな地球が「多様性のなかの調和」をめざして課題に取り組みました。そして、相容れない価値観の衝突がある一方、違いの中に共通点を見つける喜びや、多種多様な状況での交流を楽しみました。今回経験した「多様性の愛し方」はまだ完全なものではありません。しかし、私たちは今後、それぞれの生活に戻って、新たな人の輪の中でこの「愛し方」を探求し続ける努力を惜しまないことを、ここに宣言いたします。



第44回全国七大学総合体育大会

— 本学 総合4位 —

第44回全国七大学総合体育大会（七大戦）が、7月上旬から9月下旬を中心に、九州大学を主管校として、同大学及び近隣運動施設等を利用して開催され、27種目で熱戦が繰り広げられました。

この体育大会は、北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の7大学が毎年輪番制で当番校となって開催されている競技大会で、昭和37年に第1回大会が北海道大学主管で開催されて以来、約半世紀近くもの間行われている伝統ある大会です(当初は、「国立七大学総合体育大会」として始まりましたが、

法人化後、「全国七大学総合体育大会」に改称されました。)

今大会は、主管校である九州大学が総合優勝を果たし、本学は、北海道大学、京都大学に次ぐ総合4位でした。一昨年の優勝、昨年の3位に比べると不本意な結果となりましたが、個々の競技では、グライダー競技で6連覇を、バドミントン男子は6戦全勝で優勝するなど、6種目の競技において優秀な成績を修めました。

なお、第45回大会は、大阪大学を主管校として開催される予定です。



- | | |
|---|---|
| 1 | 2 |
| 3 | 4 |
- 1 バドミントン男子
 - 2 レセプションであいさつする吉田体育会常任委員長
 - 3 硬式テニス男子
 - 4 アーチェリー

第44回全国七大学総合体育大会成績表

	北海道大学		東北大学		東京大学		名古屋大学		京都大学		大阪大学		九州大学		
	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	順位	得点	
アイスホッケー	1	10.0	2	8.0	5	3.0	4	4.0	6	2.0	7	1.0	3	6.0	
ス キ ー					3	3.0	4	2.0	2	4.0	1	6.0	5	1.0	
航空 (グライダー)			3	4.0	4	3.0	1	8.0	2	6.0	5	2.0	6	1.0	
馬 術	4	3.0	6	1.0	5	2.0	3	4.0	2	6.0			1	8.0	
柔 道	3	5.0	2	8.0	6	1.5	6	1.5	5	3.0	3	5.0	1	10.0	
硬 式 テ ニ ス	男子	7	1.0	3	6.0	6	2.0	1	10.0	5	3.0	2	8.0	4	4.0
	女子	5	3.0	4	4.0	1	10.0	3	6.0	7	1.0	2	8.0	6	2.0
ヨ ッ ト	2	6.0	5	2.0	6	1.0			4	3.0	3	4.0	1	8.0	
水 泳	1	10.0	7	1.0	4	4.0	3	6.0	2	8.0	5	3.0	6	2.0	
空 手 道	5	3.0	7	1.0	1	10.0	6	2.0	4	4.0	3	6.0	2	8.0	
少 林 寺 拳 法	4	4.0	5	3.0	6	2.0	7	1.0	1	10.0	2	8.0	3	6.0	
剣 道	男子	6	2.0	5	3.0	4	4.0	3	6.0	2	8.0	7	1.0	1	10.0
	女子	3	6.0	7	1.0	4	4.0	6	2.0	5	3.0	1	10.0	2	8.0
バ ス ケ ッ ト ボ ー ル	男子	2	8.0	5	3.0	4	4.0	6	2.0	3	6.0	7	1.0	1	10.0
	女子	1	8.0	2	6.0			4	3.0	6	1.0	3	4.0	5	2.0
ハンドボール	5	1.0	4	2.0	2	4.0			3	3.0			1	6.0	
陸 上 競 技	男子	7	1.0	2	8.0	5	3.0	3	6.0	1	10.0	4	4.0	6	2.0
	女子	7	1.0	4	4.0	3	6.0	1	10.0	2	8.0	6	2.0	5	3.0
フェンシング	4	3.0	3	4.0	6	1.0			1	8.0	2	6.0	5	2.0	
バドミントン	男子	3	6.0	2	8.0	5	3.0	1	10.0	6	2.0	7	1.0	4	4.0
	女子	1	10.0	4	4.0	7	1.0	3	6.0	2	8.0	6	2.0	5	3.0
ラ ク ロ ス	男子	5	3.0	4	4.0	2	8.0	7	1.0	6	2.0	3	6.0	1	10.0
	女子	3	2.0							1	4.0	4	1.0	2	3.0
準硬式野球	2	8.0	3	6.0	7	1.0	5	3.0	6	2.0	1	10.0	4	4.0	
バレーボール	男子	6	2.0	7	1.0	3	6.0	4	4.0	5	3.0	2	8.0	1	10.0
	女子	2	8.0	3	6.0	7	1.0	4	4.0	5	3.0	6	2.0	1	10.0
硬式野球	1	4.0					2	3.0			3	1.5	3	1.5	
弓 道	男子	2	8.0	3	6.0	1	10.0	6	2.0	5	3.0	7	1.0	4	4.0
	女子	3	6.0	5	3.0	4	4.0	1	10.0	6	2.0	7	1.0	2	8.0
自 動 車	2	8.0	3	6.0	7	1.0	5	3.0	6	2.0	4	4.0	1	10.0	
ソフトテニス	男子	4	4.0	6	2.0	1	10.0	5	3.0	2	8.0	3	6.0	7	1.0
	女子	1	10.0	4	4.0	7	1.0	2	8.0	3	6.0	5	3.0	6	2.0
洋弓 (アーチェリー)	7	1.0	6	2.0	5	3.0	1	10.0	4	4.0	3	6.0	2	8.0	
ゴ ル フ	4	4.0	5	3.0	3	6.0	2	8.0	1	10.0	7	1.0	6	2.0	
体 操	2	8.0	7	1.0	3	6.0	6	2.0	1	10.0	5	3.0	4	4.0	
卓 球	男子	5	2.0	3	4.0			6	1.0	1	8.0	4	3.0	2	6.0
	女子	1	6.0	5	1.0			3	3.0			2	4.0	4	2.0
総 合 得 点	175.0		130.0		128.5		154.5		174.0		142.5		191.5		
総 合 順 位	2		6		7		4		3		5		1		

東海地区国立大学体育大会及び全国七大学総合体育大会を終えて



平成17年7月2日（土）・3日（日）に三重大大学の主管で実施された東海地区国立大学体育大会（東国体）では、前回大会（静岡大学主管）では惜しくも準優勝でしたが、見事優勝を飾ることができました。

この勢いをかって、8月3日（水）～7日（日）まで、九州大学の主管で実施された全国七大学総合体育大会（七大大戦、於：福岡市民体育館）では、前回大会（北海道大学主管）では3位でしたが、東国体に続き七大大戦でも優勝を成し遂げました。大会最終日には、北海道大学と優勝を賭けた一戦を行いました。見事北海道大学を撃破し、七大大戦の戦績は6勝0敗の完全優勝でした。

また、5月下旬に実施された名阪戦（大阪大学主管）でも大阪大学を下し優勝をしています。

今年度は大学対抗試合にはすべて優勝の戦績を残せました。

これは、今年は一年生部員が多く入部したこともあり、今まで以上に活気のある部活になったこと、部員一同が蒸し暑い体育館の中、日々精一杯の練習に励んできたことの成果と言えます。その練習の中でも印象に残っているものは、毎回の練習で必ずと言っていいほどやっていたノック練習。体力のない自分にとってはとても厳しい練習ではありましたが、そのおかげで試合でもあきらめることなくシャトルを追いかけられたのだと思います。

試合の時コートの中で自分がプレーしているときだけでなく、応援のときもみんなで声を出して優勝を目指していたことを今でも鮮明に思い出することができます。

今回の東海地区国立大学体育大会、全国七大学総合体育大会、この二つの大会は部員全員にとってとても良い経験になりました。

これからも、この結果に満足せず、努力は必ず力になるのだと信じ、各自が自分の技術を更に高め、今年のような好成績を次年度も残すことができるように頑張っていきます。

皆さん、応援よろしくお祈りします。

◇東海地区国立大学体育大会参加大学

名古屋大学、名古屋工業大学、愛知教育大学、豊橋技術科学大学、三重大学、岐阜大学、静岡大学、浜松医科大学の計8校

◇全国七大学総合体育大会参加大学

北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学の計7校

◇名阪戦

大阪大学体育会と名古屋大学体育会の対抗戦



野村 太志（のむら ふとし）
工学部電気電子・情報工学科
1年
愛知県出身

- | | |
|---|-------------------------------|
| 1 | 1 七大大戦・大会4日目 九州大学と対戦中の野村・中嶋ペア |
| 2 | 2 選手の熱戦を応援する部員たち |

放射線施設の安全管理業務について思うこと

内藤 壽朗
 全学技術センター共通基盤技術支援室安全管理技術系先任技術専門員

私は、生命農学研究科の放射線施設で安全管理業務に長年携わってきました。

施設では、放射性同位元素で標識された化合物を用いて、様々な研究が行われています。

私が採用された当時の施設は、設備は老朽化しており、施設の改修が大きな問題点でありました。研究科や関係する委員会等の先生方、事務方等のご尽力もあり、徐々に改修され、多くの研究者、学生等に利用されています。安全管理業務では、放射性物質や放射線機器等の管理を行うことは重要な業務ですが、時によっては、それを利用する人が対象となる場合もあります。管理室で業務をしていると、放射線に対するとらえかたは、人により様々であることに気がつきます。たとえば、被ばくや汚染について全く無頓着な学生、逆に、遮へいを必要としない極低エネルギーの放射性物質を使用する実験で必要以上に遮へいをする学生、放射線測定機器であるサーベイメータのスピーカの音が気になると言ってくる学生等様々です。教育訓練がある面で不足しているのかなと思う点もありますが、どうもそれだけではないようです。このような場合には、まず、十分に説明を

行い、それでも不安そうな人には、不安となる部分を無くすことを優先的に考え対応することが重要であると思います。このように、安全管理業務では、利用者等との、コミュニケーションを図ることは必要であり、場合によっては、これが、結構大変な事でもあります。さて、最近、技術職員として職場で思うことは、法人化に関わらず特色ある大学には、やはり特色ある技術を持った技術職員が必要ではないかと考えています。それには、技術職員の位置づけは重要な課題ですが、技術を継承する人材の育成方法も、同様に重要であると思います。



- | | |
|---|---|
| 2 | 1 液体シンチレーションカウンターと筆者 |
| 1 | 2 (左から) β (γ) 線用シンチレーションサーベイメータ、
125I 用シンチレーションサーベイメータ、 β (γ) 線用GM管サーベイメータ |

ないとう としろう
 1955年2月1日生まれ

X線観測衛星すざく(朱雀)、目を開ける！

國枝 秀世 大学院理学研究科教授

人類は永らく可視光でのみ、宇宙を見て来ました。それは、地球が厚い大気に守られ、紫外線、X線などの光が地上に到達しないからです。宇宙を見る波長域の窓を一気に押し広げたのはロケットや人工衛星を用いた、宇宙からの観測でした。その最も重要な例がX線観測です。

皆さんに最も身近なX線と言えば、レントゲン写真ですが、これは可視光の千倍以上のエネルギー



図1

を持つ光で、地上では数万ボルトの電圧で加速した電子を金属にぶつけて発生させます。宇宙にも、こうした高エネルギーの光を生み出す、激しい現象があまねく存在する事が、1962年のX線天体の発見以来、わかってきました。

日本では、X線天体の発見からすぐX線観測を始め、早川幸男先生率いる名古屋大学のX線グループは世界で三番目のグループとして観測に成功しました。その後、1979年のはくちょう衛星以来、てんま、ぎんが、あすか、とX線天文衛星を打ち上げました。その中で、常に名古屋大学は主要な部分を担当し、人材を輩出してきました。

そのシリーズ第5弾として、今年7月10日、すざく衛星が無事、打ち上がりました(図1)。名古屋大学のX線グループは、得意のX線望遠鏡を、NASAゴダード研究所と一緒に開発しました。この衛星には5台の望遠鏡に2種類の焦点面検出器、望遠鏡を持たない硬X線検出器1台が載っています。私達が作ったX線望遠鏡(図2)は、普通の天体望遠鏡とは似ても似つかない形をしています。すざくでは、円錐の内面を反射面として、これを同心円に200枚近く並べています。口径は40 cm、焦点距離が4.5-4.75 mになっています。

打上後、すざく衛星は、高度580 kmの円軌道に入り、順次、観測装置の立ち上げを行いました。しかし、高い分光性能を持った検出器1台が、突然、冷却用の液体ヘリウムを失い、観測できなくなりました。すざくにとって、画期的な検出器として期待していただけに、ショックでした。しかし、残りの4台の望遠鏡に取り付けられたX線CCDカメラは順調に立ち上がり、硬X線検出器と共に定常観測に入りました。



図2

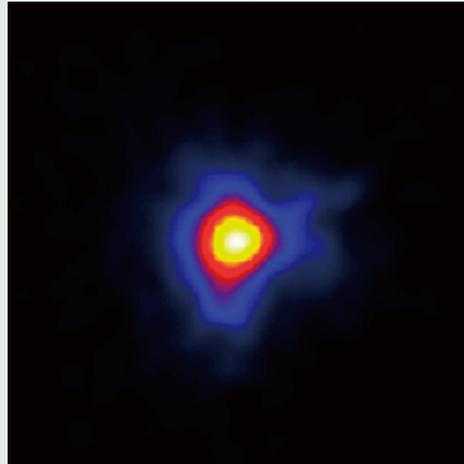


図3

図3は、最初に観測をした天体の像です。無事きちんとした像が見えたときは、望遠鏡を作った我々は、ホッとしました。地上とスペース実験の違いは、打上時の振動衝撃、真空など、大変厳しい環境に晒され、しかも修理に行けないところです。万全の準備をしても、何が起きても不思議はない、と言う点がその怖さです。

すざくは、X線 CCD カメラと硬 X線検出器を用い、波長にすると、4 ナノメートルから4 ピコメートルにわたる3ケタの広い波長域を、初めて同時にカバーできます。天体現象では、様々な波長域で異なったプロセスで放射が起きています。X線の中でも、1000万度と言う高温のガスが発するナノメートル前後の軟X線、ブラックホールへ落ちて行くガスが発する更に高いエネルギーのX線もあります。ピコメートルに近づくような硬X線は、天体から吹き出すジェットや、地上の加速器よりも

はるかに高いエネルギーの加速領域から放射されます。広い帯域を一度に見ると、強度分布（スペクトル）の変動から、どんな機構が、こんな、とてつもない現象を作っているか、明らかにできません。私達にとって、画像もさることながら、その広い帯域のスペクトルを調べることが現象解明には決定的です。

都の南を守る守護神、すざく（朱雀）は、今、X線を見る目をようやく開き、宇宙の高エネルギー現象を、食い入る様に見始めています。その「目」を作った私達は、すざくを大切に育て、名古屋大学が先頭になって、世界の研究者と共に、これまでの常識を覆す「発見」ができれば、と夢見ています。また、その夢の続きとして、更にエネルギーの高いX線の観測を旨とし、ブラジルで気球実験を計画しています。丁度そのための学術協定に総長の署名を頂いたところです。

1975年 名古屋大学理学部物理学科卒業
 1979年 名古屋大学理学部助手、助教授
 1999-2005年 宇宙科学研究所教授
 2005年4月 名古屋大学大学院理学研究科教授
 すざく衛星 Project Scientist
 名古屋大学陸上競技部部長

くにえだ ひでよ



「人類生存のための科学」という実験

戸田山和久 大学院情報科学研究科教授

—勉強なさい。勉強なさい。大人は子どもに命令するよ。勉強なさい。偉くなるために。お金持ちになるために。あ～あ～あ～あ、そんなの聞き飽きた。

小学生の私のお気に入り番組は『ひょっこりひょうたん島』でした。漂流する小島に残された子どもたちを教えているのは、サンデー先生という女性です。ところが、この子どもたちがなかなかの悪ガキで、勉強しましょうと言うと、上の歌を歌って反抗する。しかし先生は次のように歌い継ぎます。

—いいえ、よい大人になるためよ。男らしい男？、女らしい女？

ちよっとの逡巡ののち、決然と言い放ちます。一人間らしい人間。そうよ人間になるために、さあ勉強なさい！

私の子ども心を動かしたのは、大人には答えられまいということを見越して発せられた小ずるい問いかけに正面から答えようとする、サンデー先生の毅然とした態度でした。

現在の大学は「何のために学ぶのか」という問いに、まともに答えようとしているのでしょうか。とりわけ学部教育において。我々は、もっぱら後継者育成という観点からカリキュラムを考えてきました。しかし、多くの学生が学部や修士課程で卒業していきます。ということは、彼らは「科学を途中まで勉強しかけた人」として世に出て行くこととなります。オードブルに続きスープが出たあたりで「このへんでお引き取り下さい」と言われるようなものですね。とてもサンデー先生に顔向けできないなあ、と思うわけです。

情報文化学部には、進路を絞ることのできなかった学生が多く入学してきます。こうした学生

のモチベーションをどのように高めようか、というのが悩みでした。そのための一つの試みが、多くの教員の協力で実施されている「人類生存のための科学」です。

この授業ではまず、大学で学ぶことの意味を「教養」の獲得にあるとします。ここでの教養とは、「自分は何者か、自分はどこから来てどこへ行くのか」という問いを、時間的・空間的に巨大なスケールで考えようとする態度と能力、と定義されます。次に、教養の獲得に必要な思考習慣として、認知バイアスの自覚、批判的思考、相対化の視座、他者との出会いの重要性を強調します。こうした準備ののち、思考スケールを広げる訓練として、最も身近な他者である情文教員へのインタビューを行ってまいります。

後期では、思考スケール拡大の最良の手段として科学を位置づけます。なぜなら、極微の世界、遠い過去など、直接見ることのできないものについて知識をもたらしことが科学の重要な機能だからです。次に、科学の成果に対比した「科学でわかるとはどういうことか」を知ることが重要だというメッセージを伝えます。このため、数名のゲスト教員に研究生活について語ってまいります。

学部教育で育てるべきは、学者になれなかった人ではなく、科学を学んだ市民、つまり科学的思考を社会のそれぞれの場面での問題解決に生かせる市民でしょう。そこで最後に、科学的思考をどのようにローカルな問題解決に生かしていけばよいのかについて、いくつかのケーススタディを行い、think globally, act locally という標語の真の意味を理解してもらうことにしています。

と、このように書いていると、われながら素晴らしい授業のように思えてきます。しかし、どん

な授業もデザインしたときは最高の授業だが、実践すると最低の授業になるとの箴言（ウソ、私が言ってるだけ）のとおり、この授業は悩みと試行錯誤の連続です。『ひょうたん島』では、先生の

迫りに押された悪ガキが
—そうだとも、泣けちゃうな。今の一言みんな、
忘れる～な～。
と歌って、おとなしく着席するわけですけども。

情文教員がおすすめする
「若い奴らはこれを読め！」



Booklist
2005

井口治夫（アメリカ政治史・日米関係史）
のすすめ本（インタビュー：0班ふくやま）

●ダニエル・ヤーゲン『市場対国家』（日本経済新聞社）
第二次世界大戦以降の各国経済について、市場と国家のどちらが主導権を握るのかということ、自由主義からケインズ流の修正資本主義（政府が市場に対して、規制などの介入を行う）へ、そして修正資本主義の破綻とそれに続く自由主義へ移り変わっていく様子を経済の



「考え方」に焦点を絞って、どのように経済に対する人々の「考え方」が変わってきたのかを政治家や官僚、そして経済学者に対するインタビューを通じて描いているものである。

●E. H. カー『歴史とは何か』（岩波新書）
この本は「歴史とは何か」を考えることから始まり、社会的現象を科学として因果関係として把握することの意味を自然科学との対比で説明したものである。まず、アカデミックの世界では常識であるが、自然科学を含め、「科学的法則とは、絶対的真理というものではない」という考えから出発する。そして、「科学は将来の行動のための一般的指針を与える一方、偶然的要素を

教員インタビューの結果、作成した「おすすめブックガイド」

1958年生まれ。1988年東京大学大学院人文科学研究科満期退学。1988年名古屋大学教養部講師。現在、大学院情報科学研究科（情報文化学部）教授。
専門は、科学哲学、科学技術社会論、技術者倫理。
現在の趣味は、明治のころのあまり有名でない作家の文章を読むことと文体模写。

とだやま かずひさ



9. 医学部附属病院 新中央診療棟（第2回）



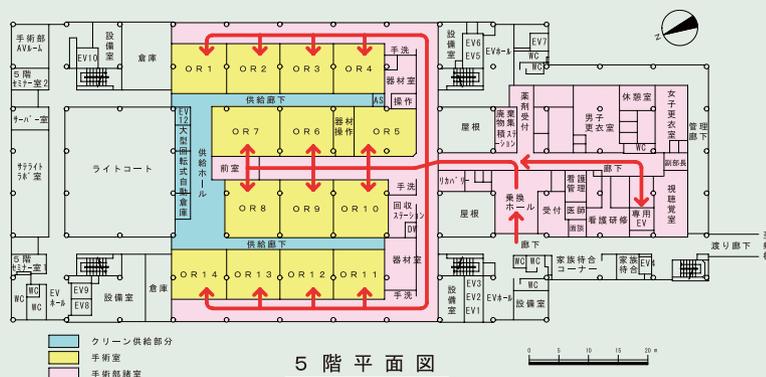
前回に引き続き、平成17年6月に完成しました医学部附属病院の新中央診療棟、今回は手術部門を紹介します。

手術部は5階にあります。手術室内は清潔な空気を供給するための大きな空調設備室が近くに必要のため、最上階の6階に手術室用空調設備室を設け、その階下の5階に手術室を配置しました。また、手術に必要な器材を洗浄・組立・滅菌し手術室に供給する材料部を一元化して手術部直下の4階に配置しました。手術部を中心に上下階に関連する部屋を設置することで動線距離の短縮、エネルギーの効率化と搬送床面積の縮小を図っています。

手術部では清潔管理が厳しく求められます。そこで新中央診療棟では、使用前の滅菌器材の清潔管理に重点をおいた“供給ホール型”のプランを採用しました。この型では患者は外周廊下側から

手術室に入り、術後は同じ経路を戻って集中治療部（ICU）や病棟へ帰されます。手術関係職員は、更衣室で着替えをした後、患者と同じ動線をたどり手術室に入ります。よって、患者・手術関係職員・廃棄物等（非清潔区域）と供給ホールの滅菌器材（清潔区域）とは完全に分離されます。また、その場所の清浄度が一目で判るように床の色や壁の色を変える工夫もしています。この“供給ホール型”で清潔管理を行うことにより確実な感染防止対策がとれます。

手術室の大きさは、一般病院や従来の大学病院の大きさ（平均6m×7m=42㎡）よりも教育病院として必要な臨床研修の学生が入るスペースを確保するため（9m×8.5m=77㎡、9m×9.9m=89㎡等）大きく取ってあります。また、手術患部の映像を学生に見せることができるように撮影カメラ（術野観察カメラ）・大型ディスプレイ



- 1 鶴舞キャンパス（中央が新中央診療棟）
- 2 5階平面図
- 3 手術室（OR1）
- 4 供給廊下（清潔区域）
- 5 手洗いと回収廊下（非清潔区域）
- 6 バイオクリーン手術室（OR7）



を全ての手術室に設置します。

職員及び患者の環境・情報公開にも配慮し、環境支援システムと観察カメラシステムを導入することとしました。環境支援システムは、部屋の温度・湿度・クリーン度・無影灯制御を自動的に整え、その手術中の環境データを残すことができます。また、室内観察カメラと術野観察カメラは、安全監理の充実を図ると共に患者や家族の方々への情報公開も可能としています。

手術室の仕様は標準（ユニバーサル）化し各診療科専用とせず手術室の効率的な運用を目指すと共に将来出現してくる手術機器に柔軟に対応できるように固定機器を設置しないこととしました。全ての手術室が暗室にできる機能をもっており、内視鏡手術、顕微鏡手術に対応可能であるとともに、多くの手術室でX線撮影、血管造影撮影、CT撮影が可能のようにX線防護を施しています。

しかし、特殊な手術のためには特殊な医療機器が必要となります。次に特殊な手術室機能を紹介します。

OR（オペルーム）3は泌尿器科手術の際に大量に出る感染系排水を処理する排水システムを導入しています。

OR4は体温管理が未成熟な新生児・小児の体温を下げないための高温手術ができる手術室で、患者周囲は40℃にすることが可能になっています。

OR5は手術中にMRI（核磁気共鳴装置）により腫瘍位置の正しい特定や、腫瘍切除が不完全だった場合でも、再度腫瘍の残留部位を同じ手術中に確認し除去できるようになっています。このMRIのために手術室は磁気・電波を通さない構造（シールドルーム）と装置を入れても十分な広さと操作室を持っています。

OR6は手術中に手術室内で電子線治療ができ

るように床に厚さ10cmの電子線遮蔽銅板（約7.2t）を埋め込んであります。手術室内で電子線手術中照射治療をおこなうことで、従来手術中に高エネルギー治療室まで移動させて照射治療していた患者・職員への負担を軽減できます。

OR7、8は人工関節手術をはじめ各種の移植手術に対応できるように、一般の手術室では空気中の埃の数を表す値がクラス10,000ですが、さらに埃が少ないクラス1,000の清浄度とすることができます。また天井照明も埋込み型とし清潔度確保に留意しています。

OR9はOR10とともに天井高さを3.2m確保しロボット手術装置の導入も可能としています。

OR10は心臓外科手術用に患者周辺で15℃の低温で手術ができるようになっています。

OR11とOR12は陽陰圧手術室として開放感染症の手術にも対応できる空調設備を備えています。

手術部には6階集中治療部（ICU）への患者運搬と緊急患者用に専用EVを設け、1階救急部から屋上へリポートを結ぶ太い動線を確保しました。これにより外部から手術室までの患者の運搬時間が短縮され救命率が高まることが期待されます。

手術器材・廃棄物自動回収システム及び4、5階を結ぶ既滅菌器械は壁面を利用した大型回転式自動倉庫を導入することより作業の効率化・自動化をはかり、既滅菌器材保管庫を無くしました。

このように新中央診療棟の手術部門は、現在可能な最高レベルの手術・教育環境を整え、今後、医学部附属病院のみならず名古屋大学の誇れる施設として、手術により多くの患者の命を助けることができるようになることを目指すと共に優秀な医師や医療スタッフの輩出が期待されます。

（施設管理部）



キャリア再設計セミナーを開催

●大学院教育発達科学研究科

大学院教育発達科学研究科は、9月12日（月）から22日（木）までの土・日曜・休日を除く8日間、キャリア再設計セミナーを開催しました。

このセミナーは、新たな生き方、特に再就職を考えている又は考えようとしている30～50歳程度の方々を対象に、世の中と自分自身を理論的かつ客観的に捉える手助けを



セミナーの様子

し、キャリア再設計の考え方、技術、アプローチの面での支援を行うことを目的として開催されたもので、2月のセミナーには、約50名の参加がありましたが、今回は、30～40歳代の再就職希望者に限定したため、9名の参加となりました。

セミナーでは、「うつ、社会、創造性」（津田 均総合保健体育科学センター助教授）、「若々しく生きるための体力管理」（島岡 清同センター教授）、「企業の人材観とキャリア開発」（牧野正人民間企業人事担当部長・本学大学院経済学研究科修士課程修了）、「キャリア形成のしくみ」（寺田盛紀教育発達科学研究科教授）、「再出発の生き方体験談」（伊藤彰茂愛知みずほ大学講師ほか話題提供者3名）、「キャリア開発の進め方1・2」（山田徳男人材コンサルタント・本学教育学部卒業生）、「全体ディスカッション」の8講座が、また、後半の講座終了後には、希望者にキャリアに関する個別相談が行われました。最終日には、参加者全員に修了証が授与され、セミナー終了後に実施したアンケートでは、「これからの人生を具体化できたことで、前途が少し明るくなった」、「次のステップに向けたセミナーも実施してほしい」等の回答が寄せられました。

シンポジウム「裁判員裁判について考える」を開催

●大学院法学研究科

大学院法学研究科及び法科大学院は、9月23日（金）、法学部棟第3講義室において、シンポジウム「裁判員裁判について考える～ある殺人未遂事件の裁判～体験！裁判員～」を開催しました。

このシンポジウムは、平成21年5月までに実施予定の裁判員裁判について、広く一般市民の方々に考えてもらう機

会を提供することを目的として、名古屋地区の法曹三者（名古屋地方裁判所・名古屋地方検察庁・愛知県弁護士会）の全面的な協力を得て開催されたもので、当日は、法学関係者だけではなく、多くの一般市民の方々の参加やマスコミ関係者の取材があるなど、裁判員裁判についての関心の高さを伺わせました。

第1部の模擬裁判では、文系総合館3階に今年6月に完成した刑事模擬法廷において、現職の裁判官・検察官・弁護士に、裁判員を加えて、実際の裁判員制度に則った形で、証人尋問や被告人質問が行われ、その模様は、法廷の収録システムと学内ネットワークを用いて、会場の法学部棟第3講義室にもリアルタイムで中継されました。

第2部のパネルディスカッションでは、裁判員裁判導入の意義や今後の課題と展望について、現職の裁判官・検察官・弁護士との意見交換が行われました。また、パネルディスカッションと並行して、裁判員と裁判官による模擬評議も実施され、裁判員からは、「議論が堂々巡りになってしまった」、「1つの結論を出すのは難しい作業だと思った」、「重い責任を感じた」等の感想が出されました。



模擬裁判の中継を見る参加者

法学研究科・ウズベキスタン代表团一行が 中山文部科学大臣を表敬訪問



右から、ミルソピット駐日大使、中山文部科学大臣、ルスタムバーエフ学長、佐分法学研究科長、中山恭子氏

豊田理事、佐分法学研究科長、市橋克哉法学研究科教授並びにウズベキスタン共和国のルスタムバーエフタシケント国立法科大学長、ミルソピット・オチロフ駐日大使ら一行は、9月22日（木）、中山文部科学大臣を表敬訪問しました。

初めに、佐分法学研究科長から、中山文部科学大臣に、大臣をはじめ文部科学省関係者の支援により、9月7日に、タシケント国立法科大学で日本法教育研究センター開所式を開催できたことについて、お礼が述べられました。

会談では、中山文部科学大臣が、ウズベキスタンには、法律だけではなく、経済発展、中小企業の振興も大事であり、経済的に今一番元気な都市である名古屋の良いところを取り入れ、同国全体が発展することを希望していると話され、これを受け、ルスタムバーエフ学長が、法学分野以外でも、本学と交流を図り、これを実現するために努力していきたいと述べました。

国際シンポジウム 「モンゴル遊牧社会と土地所有」を開催

●大学院法学研究科・法政国際教育協力研究センター



シンポジウムの様子

大学院法学研究科及び法政国際教育協力研究センターは、9月17日（土）、18日（日）、大学院国際開発研究科多目的オーデトリウムにおいて、科学研究費補助金特定領域研究「アジア法整備支援」及び同基盤研究(A)「モンゴル国の土地法制に関する法社会学的研究」により、国際シンポジウム「モンゴル遊牧社会と土地所有～体制移行国における土地私有化の比較研究～」を開催しました。

このシンポジウムは、モンゴル国で2002年に採択された土地法・土地私有化法がモンゴル遊牧社会にもたらす影響について、法学と文化人類学の立場から検討するために開催されたもので、スフバートル法務内務省副大臣とナランゲレル博士（モンゴル国立大学法学部長）ら計7名のモンゴル国を代表する法律家、ジグジッド駐日モンゴル国臨時代理大使、日本のモンゴル研究者など、100名を超える参加者により活発な議論が展開されました。

国際大学交流セミナー (JASMIN セミナー) を開催

●法学部



記念講義「法と社会生活」を行う大屋法学研究科助教授

法学部は、9月17日（土）から30日（金）の14日間、学術交流協定締結校のウズベキスタン・タシケント国立法科大学、ベトナム・ホーチミン市法科大学、カンボジア王立法経大学から、それぞれ学生3名及び引率教員1名を招き、国際大学交流セミナー「21世紀のアジアにおける法科大学の役割と国境を越えた法科大学生による法情報ネットワーク構築と展望について」を開催しました。

このセミナーは、(独)日本学生支援機構及び(財)みずほ国際交流奨学財団の共催を得て開催されたもので、親和性を図るため、Jasso・Mizuho・Nagoyaの頭文字から、「JASMINセミナー」と命名されました。セミナーでは、14日間のプログラム内で、トヨタ自動車見学、刑務所・裁判所見学、愛知県弁護士会訪問、ホームステイ、各大学教員や法学部教員による講義、ディベート、伊勢神宮見学等が行われ、多彩で充実した内容となりました。

市民・学術交流シンポジウム「プラズマとドイツ」を開催

市民・学術交流シンポジウム「プラズマとドイツ」が、9月19日(月)と20日(火)の2日間、IB電子情報館において、「日本におけるドイツ年」特別企画として開催され、2日間で延べ200名の参加がありました。

このシンポジウムは、日本におけるプラズマ応用研究拠点である本学21世紀COEプログラム「先端プラズマ科学



学生によるポスターセッションの様子

が拓くナノ情報デバイス」(Plasma-Nano、拠点リーダー：菅井秀郎工学研究科教授)、ドイツの研究拠点であるルール大学ボッフム校と低温プラズマ研究所が主体となって企画されたもので、プラズマについての学術交流だけではなく、一般市民がプラズマとドイツ文化に親しむ市民交流ができるところに特色があります。

市民交流の部では、ドイツ大使館と愛知万博ドイツ館の協力で、100名ほどの市民がドイツビールや身近な食べ物等を楽しみながら、ドイツから持ち込まれたプラズマの実演ショーを見たり、プラズマに関する市民講演会に参加したりしました。

学術交流の部では、産業応用プラズマ・天体プラズマ・核融合プラズマの3分野について、ドイツから来日した約20名の研究者と本学や核融合科学研究所等の日本人研究者が、最先端の研究成果を発表し、情報交換を行いました。学生によるポスターセッションでは、30件の発表の中から4件の優秀発表が選ばれ、また、プラズマ関連研究施設の見学会も行われました。

*「日本におけるドイツ年」…今年4月から来年3月までの1年間にわたり、日本全国で文化、科学、経済の3つの分野を柱に、300を超えるイベントが行われる。

東山総合運動場・人工芝竣工記念式を挙

●総合保健体育科学センター

今年7月下旬から行われていた東山総合運動場(陸上グラウンド)のフィールド部分を人工芝に改修する工事が、9月末に完工したのを受けて、竣工記念式が、10月13日(木)、平野総長、杉浦理事(施設整備担当)、島岡総合保健体育科学センター長等の出席のもと挙行されました。

式では、改修に携わった鹿島道路株式会社及びSRIハ



始球式の様子

イブリッド株式会社への感謝状贈呈、総長のあいさつ、始球式等が行われ、また、今年度の七大戦で優勝・準優勝等の活躍をした9つの運動部についても紹介されました。式終了後には、エキシビションとして、萩本前ラグビー日本代表監督による練習指導等が行われました。

人工芝グラウンドの導入は、国立大学では筑波大学、東京大学に次いで3番目ですが、改修で採用された人工芝は、長さ65mmという長めの芝の間に細かく砕いたゴムチップを敷き詰めたハイブリッドタイプのもので、多くのスポーツ種目に適合した最新の人工芝です。これまではグラウンドの使用は天候に大きく左右されていましたが、今後は天候によらず使用可能なことから授業や課外活動でのグラウンドの稼働率が格段に上がり、また、弾力性に優れていることから怪我も減少すると予測されます。既に、後期の授業では、サッカー受講者の増加等の好影響が出ており、この人工芝グラウンドを使って日常練習を行う運動部の今後の活躍が期待されます。

今年度の農業教育公園・講演会が始まる

●大学院生命農学研究科附属農場



講演する山田生命農学研究科助教授

今年度の地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会の第1回が、9月17日（土）、大学院生命農学研究科附属農場内の農業館において開催されました。

今年度は、「健康」を大テーマに、4回の講演会が開催される予定で、第1回は、山田容三生命農学研究科助教授が、「健康と森林浴」と題して、現代の高ストレス社会の中で、ストレスとバランス良くつきあう方法の一つとして注目されつつある森林浴の心理的・生理的効果について、約50名の参加者にわかりやすく説明しました。

講演は、「適度なストレスは、われわれの活動を高める」との説明からはじまり、ストレスを受けやすいタイプ別の行動パターンと病気の発症との関係について、各自でテストを行いました。また、山田助教授は、森林に関連してよく耳にするマイナスイオンやフィトンチッドの効用、サウンドスケープ（音風景）が人間の生理活性に及ぼす影響等について科学的実例を交えながら説明しました。

自然観察会「どのバッタが一番跳ぶかな」を開催

●大学院生命農学研究科附属農場

自然観察会「どのバッタが一番跳ぶかな」が、9月25日（日）は、一般市民、10月2日（日）は、長久手町の幼稚園児とその父兄をそれぞれ対象に、大学院生命農学研究科附属農場の放牧地及び実験・実習広場を利用して開催されました。

この観察会は、地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」の一環として、東郷町グリーンベルトを考える会の主催、附属農場の共催という形で、昨年引き続き開催されたもので、両日で約60名の参加がありました。

初めに、バッタ等の秋の虫の説明があった後、放牧地で捕虫網を使ってバッタを捕獲しました。参加者は、捕獲したバッタの名前を指導員と確認した後、1匹ずつジャンプ

台へ乗せて飛び立たせ、飛距離を測りました。1日目は風が強く、バッタが風に流されたこともあり、測定が不可能なほど飛んだものもいましたが、2日目は正確に飛距離を測定することができ、46m跳んだトノサマバッタが優勝しました。入賞者には、シュロヤススキの葉で作ったバッタが賞品として贈られました。



バッタ飛ばしの様子

平成17年度全国大学演習林協議会 秋季総会が本学で開催される

●大学院生命農学研究科附属演習林



総会の様子（於：環境総合館カンファレンスホール）

平成17年度全国大学演習林協議会秋季総会が、9月15日（木）、本学を当番校として、環境総合館及び野依記念学術交流館において開催されました。

この協議会は、林学の教育研究の発展に資するため、演習林に関する調査・研究を行い、各大学相互間の連携を図り、併せて演習林の整備や改善の促進を図ることを目的として設置されたもので、総会には、全国27の国公立大学、私立大学の教職員83名が参加しました。

総会では、同協議会が実施してきた科学研究費補助金基盤研究(A)「流域生態圏における水・熱・物質循環の長期変動モニタリングと広域比較研究」の研究成果が報告されるとともに、演習林の全国共同利用への推進と演習林実習単位の大学間の互換性についての意見交換が行われました。また、演習林業務に貢献した6名の技術職員に対して、森林管理技術賞が授与されました。

情報連携基盤センター連続講演会（第1回）・グリッド講演会を開催

情報連携基盤センターは、9月30日（金）、同センター演習室において、情報連携基盤センター連続講演会（第1回）及びグリッド協議会との共催によるグリッド講演会を開催しました。

情報連携基盤センター連続講演会は、同センターが今年3月に更新したスーパーコンピュータシステムの性能等を



講演会の様子

より多くの方々に紹介し、利用拡大を図ることを目的として開催されたもので、同システムを利用して研究を行っている研究者による講演、センターの施設見学及び画像処理の実演が行われました。

また、グリッド講演会は、今後のIT技術の基盤となるグリッド技術に関する入門者向けの講演会で、グリッドの研究開発状況やトピックス、同センターの取り組み及び全国共同電子認証基盤（UPKI）構築事業について講演が行われました。

講演会には、本学と近隣の大学の研究者や大学院学生及び企業の研究者や技術者、40名余の参加があり、熱心に講演を聞くとともに、講演後には、スーパーコンピュータシステムやグリッドについて、有意義な意見交換が行われました。

第2回ランチタイムFDを開催

●高等教育研究センター

高等教育研究センターは、10月4日（火）～6日（木）の3日間、教員を対象に、10月11日（火）～13日（木）の3日間、大学院学生を対象に、第2回ランチタイムFDを開催しました。

このランチタイムFDは、授業経験が少ない若手教員、学生の対応に困っているベテラン教員、未来の大学教師で



ランチタイムFDの様子

あると同時に非常勤等で授業を受け持つ機会のある大学院学生などを対象に、ランチタイムの短い時間（12時10分からの40分間）を活用して、授業改善のコツとノウハウを効果的に提供・共有することを目的として開催されているもので、受講料は無料で、3回とも出席した大学院学生には修了証が授与されます。また、コーヒーやスナックも用意し、昼食の持ち込みも可能であるなど、サロンのな雰囲気です。

今回は、「授業デザイン論」（中井俊樹同センター助教授）、「大学教授法」（夏目達也同センター教授）、「学生発達論」（近田政博同センター助教授）の3つのテーマで行われ、特に、大学院学生の受講者が多く、研究大学において大学教師予備軍である大学院学生が授業スキルについて学ぶことの潜在的ニーズを裏付ける結果となりました。

なお、同センターでは、好評により、来年春に、次のランチタイムFDを開催する予定です（問い合わせ先：staff@cshe.nagoya-u.ac.jp）。

国際言語文化研究科が 留学生を対象とした文化研修を実施

大学院国際言語文化研究科は、10月8日（土）から10日（月）までの3日間、長野県木曾福島町と長野市で、留学生を対象とした文化研修を実施しました。

この研修は、研究センターの生活を送り、一般の日本人との交流が希薄である留学生に、見学や研究発表等が行われる一般的な研修旅行とは異なる形で、日本文化に触れてもらおうと実施されたもので、今回は、特に、留学生が祭りに参加することにより、祭りの主催者や地域住民との交流を図ることに重点が置かれました。

1日目は、馬籠で昼食を取った後、木曾福島町が経営する鄙びた温泉で湯につかり、築100年以上の農家民宿に宿泊しました。2日目は、同町主催の関所祭りに参加し、町

民から大歓迎を受けました。参加した24名の留学生は、祭りの主催者等から様々な質問を受けたり、着慣れぬ衣装を身に付けたりして疲れた様子を見せながらも満足しているようでした。3日目は、長野市で研究推進のためのセミナーを行った後、善光寺とその門前町を見学し、研修は終了しました。



関所祭りに参加する留学生

地球水循環研究センターが 中国との共同研究ワークショップを開催



ワークショップの様子

地球水循環研究センターは、9月13日（火）と14日（水）の2日間、高等総合研究館カンファレンスホールにおいて、The Third Japan-China Joint Workshop on Lower Atmosphere and Precipitation Study を開催しました。

このワークショップは、科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業「湿潤・乾燥大気境界層の降水システムに与える影響の解明と降水予測精度の向上」（中国安徽省において、中国国家気象局との協力で、フラックス観測タワー、ウィンドプロファイラ等による観測を行う）に関わる国際集会で、50名余りの参加がありました。ワークショップでは、広域解析、3年近くにわたる現地観測データの解析、梅雨、秋雨前線などによる降水の特性や水蒸気輸送、沖縄における大気境界層観測、モデルによる大気境界層のシミュレーション等の発表が行われ、残り1年数ヶ月となったプロジェクトに多くの検討課題があることが確認されました。なお、次回は来年度中国で開催される予定です。

ICCAE 2005年度 第3回オープンセミナーを開催

● 農学国際教育協力研究センター



オープンセミナーの様子

農学国際教育協力研究センターは、9月26日（月）、第3回オープンセミナー「Rice research and development in Kenya -Current status and future prospects-」（講師：Mr. Washington O. Kouko ICCAE 客員研究員・ケニア農業研究所キボス試験場長）を開催しました。

セミナーで、同氏は、ここ数年、都会だけではなく地方でも、特に若い人たちを中心に急激に伸びている米の需要と輸入を背景に、アジア稲とアフリカ稲の交配から生まれた陸稲「NERICA（ネリカ米）」（New Rice for Africa）の普及拡大のための試験計画について説明しました。予備試験では、2トン/ha以上の生産ポテンシャルが示され、地域ごとに適した品種の選抜と栽培技術をペアにすることで普及拡大が期待できるとのことでした。セミナーには、大学院生命農学研究科の教員や学生のほか、主婦やナミビアから稲作技術研修に来ている若者の参加があり、本学による研究支援の必要性やあり方について熱心に討論しました。

博物館が被爆体験の講演会を開催



講演する外林マックスプランク研究所教授

博物館は、第6回企画展「核分裂絵巻－ベルリン・ヒロシマ・21世紀」の最終日の10月7日（金）、ベルリン在住の外林秀人マックスプランク研究所教授による講演会「広島で原爆体験、そしてドイツから学ぶこと」を開催しました。

外林氏は、自らの被爆体験を公衆の面前で行うのは今回が初めてでしたが、壮絶な体験を淡々とした口調で語り、約70名の参加者は、被爆者しか語るることのできない悲惨な体験談に聞き入っていました。また、外林氏は、敗戦国である日本とドイツが戦後の平和への動きや隣国との関係修復において違っている点、日本がドイツから学ぶべき点を指摘するとともに、長年のドイツでの生活から、アジアの中の日本という点に力点を置くことの重要性を訴えました。講演後、多くの参加者は当時の自身の思いを語り合い、活発な意見交換が行われました。

先端技術共同研究センター 第1回オープンフォーラムを開催



講演する竹田ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長

先端技術共同研究センター第1回オープンフォーラムが、9月13日（火）、野依記念学術交流館カンファレンスホールにおいて、「名古屋大学の産学官連携をどう進めるのか？」をテーマに開催されました。

フォーラムでは、産学官連携担当総長補佐の竹田ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長をはじめ、産学連携に対し多くの実績や経験を持つ同センターの森 滋勝教授及び大橋啓之客員教授が、今後の本学の産学官連携推進体制、民間企業からみた大学の産学連携の在り方、国内外の大学との比較、産学連携研究プロジェクトの企画・立案など、様々な観点から有意義な講演を行いました。当日は、今年度発足した名古屋大学協力会を通して、本学との産学連携に興味を持つ学外団体にアナウンスしたため、学外から多くの参加があり、学内外からの70名を超える参加者は、熱心に講演を聞いていました。講演終了後にも活発な質疑応答が行われ、非常に興味深い内容だったことを伺わせました。

受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H17. 6.20	第26次工作機械技術振興賞 奨励賞	大学院工学研究科助手	鈴木 教和	橋本洋平（大学院工学研究科 M1）、長谷部貴士（大学院工学研究科 M2）、社本英二（大学院工学研究科教授）と連名
H17. 6.23	未踏科学技術協会 超伝導科学技術研究会 超伝導科学技術賞	大学院工学研究科助教授	田仲由喜夫	
H17. 6.23	Photopolymer 科学技術賞	大学院工学研究科助教授	森田 慎三	
H17. 6.24	Best Paper Award in IEA/AIE-2005	大学院情報科学研究科教授	渡邊 豊英	馮鈞（大学院情報科学研究科外国人共同研究員）、朱跌尤（河海大学副総長）、向直人（大学院情報科学研究科 D3）と連名
H17. 7. 6	RADIOISOTOPES 誌 論文奨励賞	医学部保健学科助手	川浦 稚代	
H17. 7. 7	3次元画像コンファレンス2004 優秀論文賞	大学院工学研究科助教授	藤井 俊彰	谷本正幸（大学院工学研究科教授）と連名
H17. 7. 8	The IFAC Congress Young Author Prize	大学院工学研究科助教授	藤本 健治	
H17. 7.14	IEEE-NANO 2005 Best Poster Award	大学院工学研究科研究員	今泉 吉明	荒川陽一郎（大学院工学研究科 M2）、新井史人（大学院工学研究科助教授）、福田敏男（大学院工学研究科教授）と連名
H17. 8. 4	IROS2004 最優秀論文賞	大学院工学研究科助教授	石黒 章夫	清水正宏（大学院工学研究科 D2）と連名
H17. 8.15	BCSJ Award	大学院工学研究科教授	石原 一彰	
H17. 8.17	日本結晶成長学会 奨励賞	大学院工学研究科助教授	宇治原 徹	
H17. 8.18	米国航空宇宙協会 International Organizer 表彰	エコトピア科学研究所教授	北川 邦行	
H17. 8.24	日本機械学会 機械力学・計測制御部門部門賞 学術業績賞	先端技術共同研究センター教授	大日方五郎	
H17. 8.26	日本分析化学会中部支部奨励賞	大学院工学研究科助手	松宮 弘明	
H17. 9. 1	2005年日本国際博覧会・日本経済新聞社 愛・地球賞	愛知県・名古屋市地域集積型共同研究事業による高度処理研究グループ		入谷英司（大学院工学研究科教授）、向井康人（大学院工学研究科助教授）、片桐誠之（大学院工学研究科助手）、鈴木憲司（エコトピア科学研究所教授）
H17. 9. 2	13th International Clay Conference 優秀講演賞	大学院工学研究科助手	由井 樹人	
H17. 9. 9	第58回コロイドおよび界面化学討論会 ポスター賞	大学院工学研究科助手	増田 佳丈	河本邦仁（大学院工学研究科教授）と連名
H17. 9.15	Best Paper Award in KES-2005	情報連携基盤センター助手	小尻 智子	村瀬陽介（大学院情報科学研究科 M2）、渡邊豊英（大学院情報科学研究科教授）と連名
H17. 9.21	日本数学会 第4回解析学賞	大学院多元数理科学研究科助教授	中西 賢次	
H17. 9.26	SB05Tokyo 記念サステナブル建築・住宅賞 建築部門 国土交通大臣賞	大学院環境学研究科	奥宮正哉研究室	物件名：トヨタインスティテュート グローバルラーニングセンター、設計者として受賞
H17. 9.30	大林奨励賞	太陽地球環境研究所助手	大塚 雄一	
H17.10. 8	日本地域学会 2005年度著作賞	先端技術共同研究センター客員教授	枝川 明敬	

事務職員・技術職員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H17. 9. 9	第14回日本工学教育協会賞（業績賞）	工学部・工学研究科技術専門職員	千田 進幸	
H17. 9. 9	第14回日本工学教育協会賞（業績賞）	工学部・工学研究科技術専門職員	松浦 英雄	
H17. 9. 9	第14回日本工学教育協会賞（業績賞）	工学部・工学研究科技術専門職員	山本 浩治	
H17. 9. 9	第14回日本工学教育協会賞（業績賞）	工学部・工学研究科技術専門職員	福森 勉	

受賞者一覧

学生

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H17. 8.21	第11回創発システムシンポジウム「創発夏の学校2005」審査員特別賞	大学院情報科学研究科 M2	村田 早織	鳥海不二夫（大学院情報科学研究科助手）、石井健一郎（大学院情報科学研究科教授）と連名
H17. 9. 2	平成17年度日本粘土学会 優秀講演賞	大学院工学研究科 M1	伊藤 崇徳	
H17. 9. 7	日本液晶学会 討論会虹彩賞	大学院工学研究科 M1	原 光生	福本晴彦（大学院工学研究科 D3）、永野修作（大学院工学研究科助手）、関 隆広（大学院工学研究科教授）他1名と連名
H17. 9. 7	応用物理学会 奨励賞	大学院工学研究科 M2	坂下 洋平	
H17. 9. 7	応用物理学会 講演奨励賞	大学院工学研究科 D1	能生 陽介	
H17. 9. 8	第22回有機合成化学夏季大学 ポスター賞	大学院工学研究科 M2	中川 晶子	
H17. 9. 8	第22回有機合成化学夏季大学 ポスター賞	大学院工学研究科 M2	塩見 拓史	
H17. 9.14	日本分析化学会 第54年会若手ポスター賞	大学院工学研究科 M1	崔 哲	
H17. 9.16	日本ロボット学会 研究奨励賞	大学院工学研究科 D2	丸山 央峰	
H17. 9.26	FAN ベストプレゼンテーション賞	大学院工学研究科 M1	齊藤 光生	
H17. 9.28	日本音響学会 14回ポスター賞	大学院情報科学研究科 M2	大石 康智	宮島千代美（大学院情報科学研究科助手）、西野隆典（情報メディア教育センター助手）、伊藤克亘（大学院情報科学研究科教授）と連名

*受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年9月16日～10月15日]

記事	年月日	新聞等名
1 文部科学省の国立大学法人評価委員会（委員長：理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授）は、国立大学など93法人の初の業務実績評価結果を公表 本学は「業務運営の改善・効率化」分野で「特筆すべき」との評価	9.17（土） 9.20（火）	日経（朝刊） 他4社
2 留学生は見た！おらがバビリオン：さくら・マルティネス・斎藤さん・本学学生の見たメキシコ館 広々とした大空間で豊かな自然を紹介	9.17（土）	毎日（朝刊）
3 法学研究科と法政国際教育協力研究センターが国際シンポジウム「モンゴル遊牧社会と土地所有一体制移行国における土地私有化の比較研究」を17、18日開催	9.17（土）	毎日（朝刊）
4 叙位叙勲：正四位瑞宝中綬章 石水照雄・本学名誉教授	9.17（土）	読売
5 1日に開催された「愛・地球賞」記念シンポジウムで、「持続可能な未来をつくる地球環境技術—環境の世紀と人類の課題」をテーマに、地球環境戦略研究機関理事長・森島昭夫・本学名誉教授らが討論	9.18（日）	日経（朝刊）
6 三矢保永・工学研究科教授と張賀東・情報科学研究科助手のグループは、潤滑剤に紫外線を照射した時の境界部の流動現象を利用し、高さがナノメートルレベルの凹凸パターンを生成する技術を開発	9.19（月）	日刊工業
7 月の表面の砂に含まれる窒素は約39億年前に地球から太陽風で運ばれたものとする理論を本学や東京大学などの日米共同研究チームが発表	9.19（月）	サンケイ
8 広がる高大連携：教育学部附属高校では、2002年に始まった高大連携講座「学びの杜」が、本年度から心理学など4分野で各10回の連続講義となり、選択科目で単位として認められるようになった 村上隆・教育発達科学研究科教授は「潜在能力をどう引き出すかが重要」と話す	9.19（月）	中日（朝刊）
9 日本数学会は、解析学賞に中西賢次・多元数理科学研究科助教授ら3人を選出	9.20（火）	中日（朝刊）
10 森川高行・環境学研究科教授：上海万博に教訓生かせ	9.20（火）	中日（朝刊）
11 10日に開催された読売・STS 科学シンポジウム「人類の未来と科学技術」で、理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授らノーベル賞受賞者3人が基調講演とパネルディスカッションを行う	9.20（火）	読売
12 夢フェス・スタッフ：広泰介さん・本学学生 夢フェス紹介ムービーを全力で制作	9.20（火）	中日（朝刊）
13 死因を調べる：医学部附属病院では2002年8月に起きた腹腔鏡手術ミスの際、調査委員会の委員の半数を院外から起用し透明性を高め、同年11月には、合併症を病院全体で分析する「病例検討会」などの仕組みを作った	9.20（火）	朝日（夕刊）
14 本学、名古屋市立大学、藤田保健衛生大学、愛知医科大学、愛知学院大学の5大学とモンゴルの大学が共同でモンゴルの医療水準向上を目指す「モンゴル・愛知 医学歯科医学教育国際会議」が、20日、愛知学院大学とモンゴルを衛星回線で結び、遠隔会議方式で開催される	9.21（水）	読売 中日（朝刊）

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
15 法学研究科がシンポジウム「裁判員裁判について考える」を23日開催 名古屋地裁、名古屋地検、愛知県弁護士会の地元法曹3者の協力で行われる模擬裁判とパネルディスカッションの2部構成で行われる	9.21 (水)	読売
	9.22 (木)	他2社
	9.24 (土)	
	9.26 (月)	
16 法政国際教育協力研究センターは20日、ウズベキスタンのタシケント国立法科大学のルスタムバーエフ学長を招き、同国の法改革の現状と課題を探るワークショップを開催	9.21 (水)	中日 (朝刊)
17 電気が流れる有機物質の研究開発をテーマとした藤原セミナー「有機半導体・伝導体 半世紀と将来展望」が8月31日から5日間北海道苫小牧市で開催される 開催責任者の関一彦・物質科学国際研究センター教授は「応用のすそ野が広がり、研究者の連携が薄くなっていた分野だったが、お互い刺激し合えた」と話す	9.21 (水)	読売
18 愛・地球博のイタリア館で4月から行われてきた、カルロ・ガリシ・本学イタリア語非常勤講師が流ちょうな日本語にユーモアを交えて進める「イタリア語入門講座」が20日に終了	9.21 (水)	読売
19 物質科学国際研究センターの協議会は次期センター長に巽和行・現センター長を再任	9.21 (水)	中日 (朝刊)
20 デンソーなどとの産学連携で作るP-DRGSコンソーシアム(代表:森川高行・環境学研究所教授)は、次世代ナビゲーションシステム「プロナビ」の走行実験を19日から3日間実施	9.22 (木)	日経 (朝刊)
21 本学や京都大学、九州大学などの7人の研究者が参加する研究チームが10月中旬から2ヶ月間にわたり森林浴でのストレス解消や健康増進効果を検証	9.22 (木)	朝日 (朝刊)
22 学生記者奮闘中:石原裕太さん・本学学生 それぞれの万博「閉幕」という「旅立ち」	9.23 (金)	読売
23 学生記者奮闘中:井川貴文さん・本学学生 人々を引きつける「発見」と「感動」	9.24 (土)	読売
24 留学生は見た!おらがパピリオン:金田祐子さん・本学学生の見た長久手日本館 まるで「かぐや姫」の世界	9.24 (土)	毎日 (朝刊)
25 医学部保健学科放射線技術科学専攻の創立50年記念講演・祝賀会が24日に開催され、卒業生ら約250人が集まる 愛知医科大学長・加藤延夫・本学名誉教授の講演などが行われる	9.25 (日)	中日 (朝刊)
26 股関節教室 10月23日に医学部で開催 手術紹介「ビデオで見る人工股関節」や講演など	9.25 (日)	中日 (朝刊)
	10. 1 (土)	読売
27 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授 「自然の叡智」に基づく豊かさを新しい世紀へ	9.26 (月)	読売
28 地球環境戦略研究機関理事長・森島昭夫・本学名誉教授 愛・地球博の最大の成功と意義は入場者の「市民参加」にあり	9.26 (月)	中日 (朝刊)
29 科学技術振興機構は、2005年度研究者情報発信活動推進モデル事業として「岐阜県の地質を題材とした自然誌野外教育手法の開発」(チームリーダー:東田和弘・博物館助手)、「学生のアイデアを活かした最先端科学電子紙芝居の開発」(チームリーダー:美宅成樹・工学研究科教授)など12件を新規に採択	9.26 (月)	日刊工業
30 「新産業チャレンジ交流会」10月14日に愛知県産業貿易館で開催 河口信夫・情報連携基盤センター助教授の講演など	9.26 (月)	日刊工業
31 名大サロンの主役:古尾谷知浩・文学研究科助教授 漆紙から行政の全体像を探る	9.27 (火)	中日 (朝刊)
32 博物館企画展「核分裂絵巻—ベルリン・ヒロシマ・21世紀」開催中 外山茂樹・本学名誉教授による絵と解説を中心に展示	9.27 (火)	中日 (朝刊)
33 震災ガーディアンズ:西村健さん・本学学生 2003年10月に1~3年までの10人で結成され、学生発信の防災啓発サークルとして活動	9.27 (火)	中日 (朝刊)
34 放射線公開セミナー 10月1日に医学部保健学科で開催	9.27 (火)	中日 (朝刊)
35 経済学部が同窓会の支援を受けて集中開催する「キタン講座」で、27日に読売新聞中部支社の千田龍彦経済部長が講義	9.28 (水)	読売
36 叙位叙勲:正四位 武田進・本学名誉教授	9.28 (水)	中日 (朝刊) 読売
37 松岡信・生物機能開発利用研究センター教授らの研究チームは、植物成長ホルモン「ジベレリン」を細胞内で受け取る受容体たんぱく質「GID1」をイネから発見	9.29 (木)	朝日 (朝刊) 他3社
38 福井康雄・理学研究科教授らのグループは、南米チリに設置した電波望遠鏡「なんてん」による観測で銀河系の中心にあるとされる超巨大ブラックホールに落ち込む巨大分子ガス雲を発見	9.29 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 読売
39 2006年2月に国内外のノーベル賞受賞者など学識経験者で構成する「インターナショナルアドバイザーボード」設置 議長に理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授	9.30 (金)	日経 (朝刊)
40 新エネルギー・産業技術総合開発機構は、2005年度国際共同研究助成事業として「材料の環境情報指標の国際開発と標準化」(黒田光太郎・工学研究科教授)、「大規模実世界データに基づく自動車運行動向信号処理の先導的研究」(武田一哉・情報科学研究科教授)など12件を採択	9.30 (金)	日刊工業

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
41 「アジアの平和と日本国憲法9条～日本の若者・アジア留学生と語る」10月1日開催 愛敬浩二・法学研究科教授らの講演とアジアの留学生と日本の若者の討論会	9.30 (金)	中日 (朝刊)
42 ロボットの時代到来：人気を博したロボット「DAGANE」 武田一哉・情報科学研究科教授は「あとは言語データを蓄積した分、会話能力が増す」と話す	9.30 (金)	日刊工業
43 地球環境戦略研究機関理事長・森島昭夫・本学名誉教授 愛・地球博での「環境教育」は大きな成果	10. 1 (土)	毎日 (朝刊)
44 日本学会会議は、理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授など第20期の新会員210人選出	10. 3 (月)	日刊工業
45 17世紀頃、太陽の活動周期は現在の11年よりやや長い14年だったことを本学と日本学術振興会のグループが解明	10. 3 (月)	サンケイ
46 安くて安全な公共工事がどうかを利害関係者を排除して技術評価する中間法人「社会基盤技術評価支援機構・中部」の設立記念講演会が5日開催 田中重好・環境学研究科教授ら講演	10. 4 (火)	朝日 (朝刊)
47 医学部保健学科市民公開講座「あなたはがんについてどこまで知っていますか」16日開催	10. 4 (火) 10. 7 (金)	中日 (朝刊)
48 今年8月全職員が一齐に2日間夏休みを取ったことで、電力やガスなどのエネルギー使用量は普段の33%節約、減らした金額は約2800万円に上った 平野真一総長は「来年以降も一斉夏休みを実施したい」と話す	10. 5 (水)	朝日 (朝刊)
49 曾和義幸研究員、石島秋彦・工学研究科助教授、本間道夫・理学研究科教授らがバクテリアのべん毛モーターの回転運動を解明 ナノマシンの開発などに貢献するものと期待される	10. 6 (木) 10.14 (金)	日刊工業 朝日 (夕刊)
50 留学生を対象にした「読売新聞特別講座」が5日、法学研究科で始まる 「比較アジア社会論」をテーマに、すべて英語で12月下旬まで計15回開催	10. 6 (木)	読売
51 愛知県内の各大学は産学官連携活動を幅広く展開 本学では東芝と研究インターンシップ協定を締結 工学研究科と情報科学研究科の大学院生が対象で研究者や技術者に必要な見識を養うのが狙い	10. 6 (木)	日刊工業
52 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 老人が概して携帯電話が苦手なのは情報を身に負う不安があるのでは	10. 6 (木)	朝日 (朝刊)
53 ノーベル化学賞に米・仏の3氏 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授は「オーソドックスな化学賞らしい化学賞という印象」、「30年以上の付き合いがある古くからの友人が受賞して個人的にもうれしい」と話す また、北村雅人・物質科学国際研究センター教授は「グラップス氏が画期的な触媒を開発し、構造科学的な研究を進めたのがシュロック氏だ」と説明	10. 6 (木)	日経 (朝刊) 中日 (朝刊)
54 ピロリ菌対策 昨年7月から自由診療でピロリ菌を除去している大幸医療センターによると、3種類の薬を1週間ほど飲むことで約8割の人が除菌に成功、残りの人も別の薬で除菌可能	10. 7 (金)	読売
55 科学技術交流財団が大学発ベンチャー企業の経営者が企業体験を語る講演会を11月10日開催 本学発ベンチャー企業2社など4社の経営者が講演	10. 7 (金)	日刊工業
56 名古屋市は、来年4月に設立予定の公立大学法人名古屋市立大学の市公立大法人評価委員会の委員に杉浦康夫理事、愛知芸術文化センター総長・森正夫・本学名誉教授ら5人を委嘱	10. 8 (土)	中日 (朝刊)
57 愛知万博専門部会最終回 座長の地球環境戦略研究機関理事長・森島昭夫・本学名誉教授は「精神を残して跡地の利用を」と話し、堀内守・本学名誉教授は「さまざまな分野の人が活発に議論できるエコ問題の研究機関が必要」と話す	10. 9 (日)	中日 (朝刊)
58 愛知県主催の「外国籍県民あいち会議」が8日本学で開催される 愛知県内の大学や大学院に通う留学生23人が参加し、万博後の愛知や地域での就職などをテーマに意見交換を行う	10. 9 (日)	中日 (朝刊)
59 ほとけたちのイメージを探る：宮治昭・文学研究科教授 猿と釈迦 輪廻転生への共感を誘う	10. 9 (日)	中日 (朝刊)
60 愛知学院大学教授・村松喬・本学名誉教授らの研究グループは、リンパ球を体内に効果的に配置する役割を担う糖鎖を解明	10.10 (月)	中日 (朝刊)
61 万博都市の未来：本学は旧帝大の平均と比べて規模に対する研究成果の水準は高いがそれを十分に生かできていない傾向がある 平野真一総長はその理由の一つとして「外部へのPRが下手なこと」を挙げる	10.12 (水)	日経 (朝刊)
62 情報文化学部と名古屋環境取引所は11日に連携交流に関する協定を締結 大規模な排出量取引シミュレーションや企業向けの省エネ技術データベースづくりに産学連携で取り組む 佐野充・情報文化学部長は「意義深い団体と連携できた」と話す	10.12 (水)	中日 (朝刊)
63 2003年度に採択された21世紀COEプログラム131件の中間評価が公表される 本学の「情報社会を担うマイクロナノメカトロニクス」がシステム化技術開発で国際競争力があるとの評価を受ける	10.12 (水)	日刊工業 他3社
64 教育学部附属中学・高校が2006年度の募集要項を発表	10.12 (水)	朝日 (朝刊)
65 窓：入場者減少に悩む東山動物園の有識者らによる再生検討委員会第二回会合が開催され、有賀隆・環境学研究科助教授は「地元地域との連携がなく、フェンスの中だけの改革になってはいけない」と指摘	10.12 (水)	日経 (朝刊)
66 「名古屋大リウマチ療養相談会」13日に医学部附属病院で開催	10.12 (水)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年9月16日～10月15日]

記事	月日	新聞等名
67 理学研究科はドイツのミュンスター大学と日独共同大学院事業を10月から開始 巽和行・物質科学国際研究センター教授らが学術振興会に働きかけ、院生交換による共同研究を本学でパイロット事業として実施し、来年度から全国の大学から公募する 巽教授は「海外で活躍する研究者を増やし、日本の国際化の下支えをしたい」と話す	10.13 (木)	中日 (朝刊)
68 決め技：フィギアスケート4回転ジャンプ 池上康男・総合保健体育科学センター教授は、安藤美姫選手の3年前と今年の4回転ジャンプの映像を比較し、「完成度は格段に上がった。あとは本人の感覚の問題」と危機説を打ち消す	10.13 (木)	読売
69 からくり人形師の9代目玉屋庄兵衛さんの襲名10周年を祝福する式典が12日開催され、平野真一総長ら700人が出席	10.13 (木)	中日 (朝刊)
70 大学院国際開発研究科スマトラ沖地震津波被災者支援院生有志の会が21日にインドネシア・アチェ州の支援を考えるワークショップを開催	10.13 (木)	中日 (朝刊)
71 通風筒：愛・地球博のポーランド館に展示されていた岩塩が博物館に寄贈される 足立守・博物館長は「来館者が触って、なめられるような工夫をした展示を考えたい」と話す	10.14 (金)	中日 (朝刊)
72 「文化遺産としてのモダニズム建築 DOCOMOMO100選展」では、20世紀の近代建築の記録調査と保存を推進する国際組織 DOCOMOMO の日本支部が選んだ1920年代から70年代にかけての100の近代建築物の写真や図面、歴史的経緯などが紹介されており、豊田講堂も100選に選ばれている	10.14 (金)	中日 (朝刊)
73 東海地方9月の地震：林能成・災害対策室助手	10.14 (金)	読売
74 名古屋大学ホームカミングデーの医学部・医学系研究科講演会 23日に野依記念学術交流館で開催 井口昭久・医学部附属病院院長と濱嶋信之・医学系研究科教授が講演	10.14 (金)	中日 (朝刊)
75 本学留学生会主催の新入留学生の生活支援を目的とした秋のバザーの出品物を募集	10.15 (土)	読売
76 愛知、岐阜、三重、静岡の東海4県にある本学などの国立8大学は、初めての「合同進学説明会」を16日開催	10.15 (土)	中日 (朝刊)

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
11月2日(水)～12月16日(金) 場 所：博物館展示室 時 間：10時～16時 休 館 日：月・火曜日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	第7回名古屋大学博物館企画展 テー マ：トリ 西 鶏—名大のニワトリ学：解剖学図と標本 
11月19日(土) 場 所：博物館野外観察園 時 間：10時～16時 定 員：20名程度 対 象：中学生・高校生 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	秋の体験実習1「ドングリからさぐる古代の知恵・自然の知恵」 *「ひらめき☆ときめき サイエンス～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI」(日本学術振興会との共催による中学生・高校生を対象とした研究成果の社会還元・普及事業)のプログラムの1つとして開催

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月20日(日)

場 所：博物館野外観察園
時 間：9時～12時
定 員：20名程度
対 象：中学生・高校生

秋の体験実習2「名大の野鳥観察」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

11月22日(火)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：13時30分～16時55分

公開シンポジウム

「ITとマイクログリッドの融合ー構想・実証試験ー」

内 容：大学、電力会社、研究機関、メーカーの5名の専門家が、IT技術の導入によるマイクログリッドの高効率・最適な運転制御について講演する

[問い合わせ先]

小島寛樹エコトピア科学研究所寄附研究
部門助手
052-789-5874

11月23日(水)～11月27日(日)

場 所：博物館展示室
時 間：10時～16時
入 場 料：無料

ミニ展示 博物館新着標本

「18世紀の紋章蔵書票 オルリックの蔵書票
ー樋田直人コレクションから」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



11月25日(金)

場 所：文系総合館カンファレンスホール
時 間：13時～

高等研究院フォーラム2005

テ ー マ：アジアの共通理解と総合的支援体制

プログラム

- ・研究報告
 - I 「アジアと法整備」
杉浦一孝 (法政国際教育協力研究センター長)
 - II 「東アジアにおける歴史問題の社会的メカニズムの解明」
近藤孝弘 (大学院教育発達科学研究科助教授、高等研究院教員)
 - III 「文化の翻訳：アジアにおける「公」と「私」の概念の比較」
田中重好 (大学院環境学研究科教授)
 - IV 「東海地域の産業クラスター分析と東アジアの産業クラスターの形成」
多和田真 (大学院経済学研究科教授、高等研究院教員)
 - V 「災害復旧を通じた近代化：関東大震災と百貨店」
中西 聡 (大学院経済学研究科教授、高等研究院教員)
- ・シンポジウム

[問い合わせ先]

研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛
052-788-6051



11月26日(土)

場 所：環境総合館レクチャーホール
時 間：12時30分～16時30分
主 催：大学院環境学研究科都市環境学
専攻建築学教室

第7回まちとすまいの集い

テ ー マ：世界に開いた窓と名古屋のまちづくり

プログラム

- ・オープンラボ (12時30分～13時20分)
- ・第1部 基調講演 (13時20分～15時15分)
「グリッド・シティの可能性ー名古屋の都市デザインを読み解くー」
片木 篤環境学研究科教授
「時代を映す空間構造ー新世紀への扉セントレア、愛・地球博ー」
大森博司環境学研究科教授
「豊かさ、環境意識、そして国際貢献」 久野 寛環境学研究科教授
- ・第2部 パネルディスカッション「これからの名古屋をかたる」
(15時30分～16時30分)

[問い合わせ先]

建築学教室 まちとすまいの集い事務局
(担当：山口・大木)
052-789-3587



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

11月30日(水)

場 所：シンポジウムホール
時 間：9時30分～15時20分

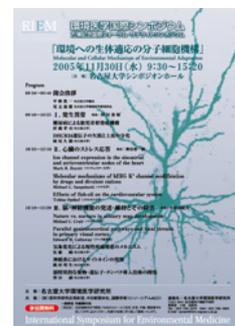
[問い合わせ先]

小松由紀夫環境医学研究所教授
052-789-3879

環境医学国際シンポジウム 「環境への生体適応の分子細胞機構」

プログラム

- I 発生異常 (9時40分～10時25分)
 - II 心臓のストレス応答 (10時35分～12時10分)
 - III 脳・神経機能の発達・維持とその障害 (13時10分～15時20分)
- *名古屋大学万博記念国際フォーラム サテライトシンポジウムとして開催



12月2日(金)

場 所：博物館講義室
時 間：14時30分～16時

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第47回名古屋大学博物館特別講演会

講 師：都築正起広島大学教授
演 題：特別天然記念物 土佐のオナガドリー愛玩から遺伝資源まで

12月12日(月)

場 所：環境総合館レクチャーホール
時 間：17時30分～19時

[問い合わせ先]

災害対策室 052-788-6038

第15回名古屋大学防災アカデミー

講 師：細川顕司(財)市民防災研究所調査研究部長 (元東京消防庁職員)
演 題：楽しいほうがいい～ゲームで学ぶ防災の知恵～

12月17日(土)

場 所：大学院生命農学研究科附属農場
内農業館
時 間：14時～16時
定 員：60名
参 加 費：無料

[問い合わせ先]

大学院生命農学研究科附属農場事務掛
0561-37-0210

地域貢献特別支援事業「都市近郊の農業教育公園」講演会

講 演 者：古橋忠晃学生相談総合センター助手
演 題：健康とストレス

名大トピックス No.150 平成17年11月15日発行

編集・発行/名古屋大学広報委員会

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)

TEL. 052-789-2016 FAX. 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

ホームカミングデイ当日、多くの参加者で賑わった豊田講堂
(平成17年10月23日撮影)



43 嚶鳴寮から国際嚶鳴館へ

2002（平成14）年、嚶鳴（おうめい）寮の老朽化と、増加する外国人留学生に対応するため、日本人学生と留学生が共同生活を営む混住型施設として、国際嚶鳴館が竣工しました。定員は約300名、居室は全て個室（バス・トイレ・エアコン付）で、3棟のうち1棟は9階建ての高層建築となっています。

これにともなって取り壊された嚶鳴寮は、1961（昭和36）年に完成したのですが、その系譜は大正時代にまでさかのぼることができます。

嚶鳴寮は、1920（大正9）年に創立された名古屋高等商業学校の構内（現名市大川澄キャンパス）にあった学生寮をその起源としています。嚶鳴とは、鳥が友を求めて鳴きかわすさまをいい（『詩経』小雅の伐木の詩による）、江戸時代の儒学者で、米沢藩主上杉鷹山の師としても知られる、細井平洲（愛知県東海市出身）が江戸に開いた私塾「嚶鳴館」からその名がとられたともいわれています。

戦後の1949年、名高商は新制名古屋大学に包括されて、経済学部の母体となりました（桜山キャンパス）。同時に嚶鳴寮も、そのまま名大の学生寮として引き継がれます。この当時は、学生の約15%が寮生活をしていました。

そして1959年、名古屋市が東山キャンパスに新築した校舎と桜山キャンパスを交換する方式で経済学部の移転が行われると、国際嚶鳴館のある昭和区高峰町の敷地に新しい学生寮が新築され、嚶鳴寮の名も継承されました。

大学文書資料室では、嚶鳴寮に関する資料をほとんど所蔵していません。このままでは、その歴史が風化してしまいかねず、本格的な資料の収集が急務であると考えています。すでに廃止された、豊川分校の振風寮、安城市の碧明寮、瑞穂分校の旧八高学寮などもふくめた、名大学生寮に関する資料の情報をお持ちの方は、どんな些細なことでもぜひ大学文書資料室までご一報ください。



1	2	3
	4	

- 1 名高商の嚶鳴寮（大正時代）
- 2 1955年頃の嚶鳴寮食堂
- 3 1991年頃の嚶鳴寮
- 4 国際嚶鳴館